

平成25年度教員研修会・教育講演会収録

(2014年2月12日受理)

「復興教育と岩手の教員に期待すること」

佐藤 進 先生

新沼：みなさんこんにちは。今日は貴重な土曜日ですけれども、県内各地からお越しいただきましてありがとうございます。先ほど名簿を見てみたらですね、南は奥州市からわざわざおいでいただきましたし、北の方は二戸市からもおいでいただきました。ありがとうございます。定刻よりも3分ほど早いですが、だいたい揃っていると思いますので、会を進めさせていただきます。今日の進行を務めさせていただきます、教育実践センターの新沼といいます。よろしくお願ひ致します。それでは、平成25年度第一回教員研修会を始めます。開会にあたりまして新妻学部長さんから、ご挨拶を申し上げます。

新妻先生：それでは、始まるにあたりまして一言ご参加のみなさんにご挨拶を申し上げたいと思います。今ご紹介いただきましたように、この第一回目の、今年度の教員研修会ですけれども、これは学部とですね、附属実践総合センターとそれから岩手県教育研究ネットワークというところが主催して、毎年ほぼこの時期に行っているものです。特にですね、学生の皆さんがこれから教員になるにあたっての、いわゆるどういった資質や能力が期待されているのか、などということも一つの大きな学習のテーマとなっていますし、それから岩手の教育の課題や現状を知っていただくということもテーマとなっています。今日はそういう点でも二つに関わってですね、適任の佐藤先生においでいただいてお話をいた

くという運びになりました。佐藤先生と私は15年ほど前にはすで知り合っていたと、なぜかというのですね、当時私が学部の教育実習委員長をやっていたんですけれども、佐藤先生は上田中学校の実習主任で、ずいぶん私どもとしてはご協力賜っただけじゃなくて事細かにお助けていただいて、ご協力いただいたということをおもいます。ただ、2、3年前のできごとのような気がしますけれども、2人とも歳をとったなあと、私の方がずっと歳をとっているんですけれども、というようなことがありました。今、被災地で、特に佐藤先生は、3月までは宮古の教育事務所の所長さんということで、現地で間近に被災地の状況、あるいは復興の在り方を見て参りましたし、ご指導も申し上げてきたところでもあります。そういう点では生々しいお話を皆さん方に実感を含めてお話していただけるのではないかとすることがまず一点です。加えて、私も被災地に何度か足を運ばさせていただきましたけれども、先生方とお話をするとやはり子どもたちの日常をどう取り戻すのか、どのように日常戻っていきけるのかということに、大変ご苦労されていたという記憶があります。そういう意味では復旧は、ハード面は徐々に進んではいるのですが、いわゆるソフト面ともう一つは復旧から復興へというのが大きなテーマなんですけれども、その復興に関わってまだまだ課題が山積しているところだと思っておりますので、今日はその辺りのお話もお聞きできればと思っております。最後ですけれども、佐藤先生は今日私と一緒にいたのですが、と言いますのは昨日は仁王小学校の公開の授業研究会があって、佐藤先

生は全体会の講評という立場でご活躍いただいて、しかも今日は休みにも関わらずここまで足を運んでいただいて、みなさんのためにお話ししていただくということで、過労にならないければいいなあというふうに心配しつつお願いした次第であります。ということで大変お忙しい中を来ていただいた佐藤先生に感謝申し上げて挨拶にしたいと思います。本日はよろしくお祈りします。

新沼：今、学部長さんからこのあとお話をいただく佐藤課長さんの一部ご紹介をいただきましたけれども、さらに詳しく井上センター長さんからご紹介を申し上げます。

井上センター長：それでは、本日ご講演をいただく佐藤先生についてご紹介申し上げます。佐藤先生は、盛岡市のご出身です。東京農業大学農学部をご卒業されまして教職に入られました。初任校は久慈市立山根中学校、二校目が大野村立大野第一中学校と県北地域に7年間勤務された後盛岡に戻られました。盛岡では城東中学校、上田中学校で14年間、理科教諭ということで活躍されました。平成12年からは教育行政の方に行かれ、水沢の教育事務所指導主事、盛岡教育事務所主任管理主事、平成15年からは県教委教職員課に迎えられまして主任管理主事として県内小中学校の教員の人事管理等の仕事に戻られました。その後、岩手町立川口中学校の校長として二年間現場に復帰されました後、また教育行政の方に戻られまして、盛岡教育事務所教務課長、宮古教育事務所長を務められまして、現在は岩手県教育委員会事務局学校教育室首席指導主事兼義務教育課長として県内の義務教育のトップとしてご活躍でございます。本日は復興教育と岩手の教員に期待することというテーマで被災地宮古の教育事務所長としての職業、豊富な行政経験から復興教育や岩手の義務教育の在り方について被災地のお話をいただ

るものと期待しております。それでは早速よろしくお祈り致します。

1 はじめに

佐藤先生：こんにちは。先程のような細かい経歴について紹介していただくのは人生二回目ということでありまして、若い皆様が多いようですが、一回目はいつかなあとかわかりますか。結婚式の時です。優秀な成績でとか持ち上げられながら紹介されたことを思い出しました。何十年も前の話であります、今日が二回目で緊張してきたなあというような気でおります。週に二回くらいこうやって話をすることが二ヶ月くらい続いているのですが、今日のはっと見て実は顔見知りの先生も何人かいます、これは絶対嘘は言えないなということは確認しましたし、学生さん方もたくさんいらっしゃるということで…。

私は先程ご紹介ありましたように盛岡出身で両親が共働きでありまして、実家は皆さんも知っているんじゃないかなあと思いますが盛岡のソウルフードとも言える「福田パン」の裏手で育ちました。今は駐車場になっていますが、私が子供のときにはそこに工場がありまして、パンが焼ける匂いがしてきて、売り出す時間が分かったので、焼き上がりを見計らってよく買いに行ったものであります。あの辺で育ったんですが、なぜか当時、家で牛を飼っていて（福田パンの裏手に牛って考えられますか）まあ50年も前ですから、確かに牛がいたんですね。まあ家族のように見ていたんですけども、ある日その牛がいなくなったんです。お肉として売られてしまったのかもしれませんが、子供心に聞いてちゃいけないのかなと思ったことをなぜか思い出してしまいました。身近に動物がいたせいかわかりませんが、農業のほうにということですね、親戚が東京農大にいたりして東京のほうに行きました。私は長男ということもあり、四年後には戻ってこいという指令があつて、東京

での生活は四年間で終止符を打ち岩手に戻ってきたということでもあります。こんな話を一時間半も聞きにみなさんは集まったわけではありませんので、ここから少しまじめにお話しさせていただきたいと思います。

2 震災からの教訓

(1) 経験から学ぶ

私は、発災間もなく宮古教育事務所での勤務を命じられ、四月一日に着任しました。三週間後という状態ですので、学校再開はできないということで、地域の入学式は四月の二十四とか二十五・二十六日でありました。よって、教育行政の仕事としては、結構、機能停止という状況だったので、自由な時間が結構あったので、この機会にとにかく地域の様子を知ろうということで、車で管内を見て廻りました。

宮古教育事務所ってというのは四市町村あります、宮古市・山田町・田野畑村・岩泉町であります。その四市町村について、自分でカメラを持って回っていろいろ様子を記録しました。被災状況を写真に撮ることについて憚るところもあったわけなのですが、ここで撮りためてまとめたものを少しみていただきたいなというふうに思います。

映像には、赤前小学校というところの入学式が紹介されています。体育館は避難所になっています。避難所の人たちが生活するところで入学式をやったという映像がでてきます。子どもたちは、辺から集めてきた台を持ってきて自分なりの勉強机を作ったり、きれいに学習道具とヘルメットと内履きを整えて置いていたりする映像もあります。その次にいくつかの被災した学校の映像が出てきます。

二か月後の六月には、運動会とか体育祭を実施する学校が出てきました。みなさんは、この頃どんな生活をしていたでしょうか。まだまだ大変な状況だったのですが、学校は子どもたちに日常を取り戻そうと、地域に活気を取り戻そうとあえて運動会や体育祭を実施したのです。仮校舍とし

て、陸中青少年の家で生活している様子とかも出てきます。当時の被災各地の様子について、理解してもらえることと思います。

(映像紹介)

これが赤前小学校の入学式の映像です。ここだけ見ていると普通の入学式ですが、反対側を見るとこういう状況になっています。避難生活している人達が見守る中での式であります。ここは鵜磯小学校です。今年度で閉校となります。だいぶ海は遠いのですが、まさかここまで波が来たのか恐ろしさを感じます。次に千鷲小学校という本州最東端の小学校です。こういう石碑もあったわけですが、この学校も統合となり閉校であります。船越小学校です。今は陸中青少年の家に間借りしています。二階まで水がきました。大きな防波堤も崩されていますが、家が残っているところと残っていないところの境は本当にシビアな関係を作ってしまうということもお聞きました。これが現在の船越小学校なんですが、陸中青少年の家で大槌北小学校と一緒に学校生活を送っています。この時期は机もなく寺子屋方式で、正座・安座の姿勢での勉強でした。こんな状態で一日生活するのは非常に大変ですが勉強ができるようになっただけで子ども達の笑顔が戻りました。こうしてパーティションを組んで仮設の職員室を作ったりしました。子どもたちはスクールバスで避難所へ。そしてこれが小本中学校ですが、屋内プールを持っていたのですが、水没してしまいました。今は仮設校舎での生活となっております。

地域に活力をとということで、宮古の第一中学校が体育祭を行いました。何事もなかったような、内陸の学校と何ら変わりのない体育祭ということになります。被災により家族を亡くした方や、つらい思いをしている保護者の方々もいる中ではありましたが、その時間はみんなで楽しむと。これは鯉ヶ崎小学校ですが、今は校庭に仮設住宅があるのですが、校庭を全面使えるうちに運動会を実施しようと、学校と地域が一体となって準備したものであります。当分こういう運動会はできないね、とそういう意味では記念の行事になりました。

鎌小は特に被災の大きい地域でしたので、映像にある、座っている人や敬老席の方々もいろいろ辛い思いをしている方ということになります。

宮古市としてもなんとか元気をということで、商店街の通りでイベントを実施し、福来旗（大漁旗）をぶら下げているところであります。中学生も積極的に参加して盛り上げました。

そして中総体です。これも野球場とかサッカー場とかいろいろ被災して使えないので、急きょ活動場所をやりくりして何とか実施にこぎ着けました。これは先生方の血のにじむような努力があったので大会で、子どもたちもそうやって自分たちのために先生方や大人が努力をしてくれたということに感謝する大会になりました。

一つ目のDVDを見ていただきましたけれども、ここで私が感じたことは「辛い時こそ上を向く」ということです。嫌なことや大変なことがあれば、人って必ず下を向くようにできている、気持ちが高ぶらないときこそ、首輪をはめてでも上を向くということを知ったことがあります。効果があるかどうかはわからないんですが、そういう考え方もあるようなので、私もできるだけ上を向いて生活していこうと思っています。

また、頑張る姿が他の人に勇気を与え、勇気がどんどん連鎖していくという話もあります。涙を見てもらい泣きしそうになることがあります。それは相手の気持ちの中が見えるという人間ならではかもしれません。それを反対にして考えると、一生懸命頑張っている人を見た時に、自分も頑張れるということもあるんだなと宮古に赴任して感じました。そして、学校にとって地域がどれだけ大切なものであるか、また、地域にとって学校の役割がどれだけ大きいのかを教えてくれる機会になったことも事実でありました。

今、学校では地域がなくて非常に困っているところがあります。発災直後は頑張る子ども達の様子を見て、大人も元気をもらったという話をよく耳にしました。学校っていうのは地域になくてはならない場所なんだと再確認しました。今、適正規模化ということで学校統合が進んでいます

が、それは効率化のためには仕方のない部分もあるかもしれませんが、地域にとっての学校の位置づけを見直すきっかけになったという事実もあります。

被災して避難所になった時に、民生委員さんとか町内会長さんとか日常の中で束ねる役割を担ってきた人たちもいらしたのですが、体育館に寄せ集まりの集団になった時に中々そのような人たちが機能しない状況もあったと聞いています。もちろん、機能したところもありましたが…。その時どうしたかということ、やっぱり先生方が出ていった。校長先生やら副校長先生やら事務職さんやらそういう人達が出てきて、「いやいやそう言わないで、まずここに一列に並んでそして話を聞いてください。」と、「意見がある人は手を挙げて発言して下さい。」みたいにして組織化したそうです。なので、学校の先生方というのは上手にコントロールして、組織化するテクニックというか技術を持ち合わせているということであります。そういう意味でも非常時における学校の役割は大きものがありました。そのことを自覚することも大切です。学校が避難所としての役割を担うことになった時、どのような対応が求められるのか、考えておく必要があります。

（2）一年という時間を経て

さて、一年という時間が過ぎ年度末になりました。それぞれの市町村の本当に語りつくせないような時間がありました。ここにもひょっとしたら被災地出身の方とか直接・間接的に様々な経験をしている方もいらっしゃるかもしれません…。

一年という時間が過ぎた時に、先ほども映像で紹介した船越小学校の6年生が、気に入った言葉をみんなで繋いでいって一つの歌詞を作りました。それにプロの作曲家が曲をつけて、「明日へ」という曲に仕上げました。この曲に乗せて、4月のいくつかの学校の入学式の様子を見てもらいたいと思います。

（DVD）

皆さんの中には、採用後にこの子どもたちと出

会う人もいるかもしれません。この子かもしれません。それが出会いというものです。震災から一年一か月でこのようになりました。女子は大方AKBルックの子たちでした。発災から一年一か月なら一年一か月と与えられた時間は平等ですが、被災地で感じることは、物理的な時間の経過は平等であっても時間の使い方は様々ということがあります。「時間とお金」をパチンコ屋やお酒に費やしている親御さんがいたり、その様子を毎日見ながら登校している子どもたちがいる反面、家を再建し順調な生活を手に入れたり…。子どもたちは自分の親を通して不合理的、不条理に直面しており、不公平感を感じている子もいるのが現実の世界でありました。学校ではどうしようもない部分でもあります。立派なお弁当を持たせられてくる子もいるし、お弁当を持ってこれない子もいるのが学校の現状であります。それが学校という同じ空間で過ごしているのです。それに対して学校はどうその状況を埋めていけばいいのかというジレンマがあったわけです。もう二年と三か月が経っているわけですが、きっとある意味不平等だったと思います。もっといい言葉があるかもしれませんが、ただ、その不平等さを中学生ぐらいになると、まさに高校生もそうなんですが、受け入れるたくましさや身につける子ども達がいることも真実であります。不平等さを嘆いても何も解決しないと。心のサポートの必要な子どももいますので、当然それはそういうことをしながらではありますけれども、全体的には逆境に負けずというスタンスは学校としてははずせないところであるという気がしました。簡単な話ではありませんが…。

(3) 振り返ることの大切さ

田老第一中学校の卒業式の時の生徒会長の答辞であります。瓦礫の撤去もままならないという避難所生活も継続されている中で中学校三年生、15歳の子どもが、こんなことを言っています。「この震災は引きずってはいけませんが忘れてもいけない。」非常に重い言葉だと、私はすごいなという

ふうに思いました。引きずってもいけないし、忘れてもいけないというこの感覚ってというのは大切にしていかなければならないものです。岩手県は全県被災地だということとらえてあります。被災地から内陸に転校した子ども達もいますが、岩手全体が被災地であり、私達はそこに住んでいるのだという認識であります。風化させることなく、そこで経験したことを教訓として語り継いでいく使っていてというのがきっとあるのだろうと。

今回も昨年と同様のテーマでお話していますが、これは、引き継いでいくべきことがあるだろうということこそそうさせていただきましたが、されど、この時間で変わったこともあるはずです。自分が変わったかどうかはやはり振り返らなければだめなんだろうなあと。振り返ることによって自分の変異が分かると。「柱のキズはおととしの五月五日の背くらべ」と歌っていますが、柱にキズをつけて一年後に立って、伸びたとわかりますよね。キズがついていなければ去年からの伸びは分からないのです。だから振り返って自分はどうか変わったのかということを見るっていうことが大切なかなあと。この子どもたちも、去年はどうだったかな、今はどうなのか、これからどうしよう、どうしていったらいいんだろうという一連の流れを見ながら、今を感じさせるという視点が必要であると思います。そして、未来を想像していくということなわけですが、たくさんの支援をしてもらっていることに対して、今度はお礼をしていかなければなりません。それは手紙を書くとかいろいろお礼の仕方があるんですが、今感じていることは、岩手は大きな被災を経験したわけですので、経験をしていない人達に教えていくこと。発信していくこと。もらいっぱなしではなくて、経験しなければ分からないものを発信していくことの責任が課せられているのかなというふうに思います。

この後で復興教育についてお話ししますが、このベースになっているのは阪神淡路大震災です。兵庫県でいろいろ取り組んだことを本県でも参考にしています。参考にしながらまた岩手で、

いろいろ見つけたこと、こうした方がいいよって
いうことを発信していかなければならないです。
それは学校一つ一つの中にもあるんだと思いま
す。あの時こんなことが起こったのだからこの時
にはこうした方がいいですよ、というのをどんど
ん全国に広めていくことが、再び自然災害に見舞
われた時の手助けになるということでもあります。

3 岩手の教育が目指すもの

(1) 岩手の義務教育

実は県の教育委員会では、先生方にこういうも
のを配布しています。「学校教育指導指針」。これ
は全部ダウンロードできますので、あとで目を通
していただければなと思います。今年度やりたな
と思っていることについて抜粋したものがここに
挙げられております。この中の3ページに示され
ているものですが、「これからの岩手の義務教育」
についてであります。

みなさんは、「岩手が目指す義務教育とは何で
すか」と問われたら何て答えますか。これは私達
がベースにしている考え方であります。ここの網
掛けしているところに何て書いてあるかという
と、「知・徳・体を総合的に兼ね備えた、社会に
適応する能力を育てる人間形成を目指す」と。簡
単に言えば、子ども達に社会に適応するための能
力をしっかり身につけさせるのだということであ
ります。

その心は、ペーパーテストが解ければいいつ
ていうことではない、スポーツだけやっていたら
いいことではない、総合的に使える力を身に
つけさせるということです。知・徳・体を兼ね
備えた人間形成を目指していくことをまずは頭
に入れていくと。そして、じゃあ人間形成の重点
は何だろうと考えた時に、実はそこに三つ書い
てあります。一つ目は、生活面の基礎基本とい
うことになっています。生活面の基礎基本って
何だと思います？このように述べられています。
規範意識ルールを守ろうよと。誰かが居心地
が良くて他の人が居心地が悪ければ社会じゃ
ないよね、みんなが居心地のいい空間を作る
ためにルールを作る

んだよねというところだと。あとは思いやり、
助け合い、これは今回の震災でも体験した部
分だと思います。家庭や地域、学校との連携
の中で培っていく。そういう力をみんなで高
めていく。少子化で子どもがどんどん少なくな
ってきている中であって、子どもが大きな財
産であることを認識すること。それを一つの
家庭とか学校に任せるんじゃなくて、地域
総ぐるみで子ども達を育てていこうと。家
庭や地域、学校との連携の中で培っていく
ことを確認するものであります。

二つ目が、学習における基礎基本であり
ます。義務教育で求められている基礎基本
をどの子にもしっかりと身につけさせる、
これが義務教育の使命であります。学校に
いる時間の約7割は勉強している時間であ
りますが、基礎基本について中心として
見ていかなければならない部分であ
ります。ただ、ここで言いたいことは、他
との比較ではないということです。平均点
で見るとということでもありません。そ
の子らしさを引き出す。如何にして一
人一人の子どもを大切にしてい
くかであります。今は車でもパソコン
でも一人一人がカスタマイズする
時代になっています。如何に個に
対応するかであります。一人一人
その子らしさを引き出すこと
です。

昨日も仁王小学校の学校公開があ
ったわけですが、子どもの可能性、
子どもの限界ってどこにあるのか
と。先生の限界なんです。子ども
の限界は先生の限界とも言え
ます。そういう思いで教壇に
立たなければなりません。先生
に指導力があれば、それに
応じて子どもの力も伸びて
いくものだと…。一人一人
の子どもの状況を見ながら、
しっかりと責任を果たして
いくことが、求められて
いることを自覚してい
かなければなりません。

三つ目は、社会に出ることの意義
とか社会人になることの意味を
理解することであり
ます。中学生は「高校に入
ればいいんだ」として、高
校入試に合格できるよう
勉強すればいい。高校に
してみても「難関大学に
何人入れるか」が目的
化してしまう…。勉強
をする目的はそういう
ことじゃないんですよ。
結局その子が自己
実現を果たせる

かどうかというのは、その子が求める、なりたい自分（社会人）になれるよう育ててあげることにあります。ですから、どういう力をどの段階でつけさせなければならないのかを見つけるための手助けをするのが学校の役目となります。「僕は社会人になって早く様々やりたいな。でも今はそういう力はないな、だから勉強しているんだ。もっともっと勉強したいな。」というふうになっていくことが理想であると思います。大学に入って燃え尽きることがあるとすれば、それは大学に入ることが目的になっているからだと考えます。入学することが目的ではなく、社会で自分の能力を発揮し、自己実現につながる生活ができるようにすることを目的とすることが重要であります。

先ほども話しましたが、学校・家庭・地域と一緒に目標を共有し合い、そのためにコミュニティ作りがあります。その牽引役はやはり学校になります。

親御さんを相手にすれば夜の時間の対応になったり、土日ということもあるかもしれません。無理することもあるかもしれませんが、一方で自分自身の生活のための時間も当然必要ですので、そこは自分自身のマネジメントについても、上手に対応することが求められます。

いずれ学校だけで全てを抱え込んでいくのではなく、地域や家庭にあるエネルギーを学校の中に取り組みながら学校運営をしていくということが求められているのであります。どこの学校が力があるかなと考えた時に、いい先生たちが沢山揃っているという次元の話ではなく、地域の人たちがどれだけ学校にエネルギーを注ぎ込む体制が取られているか、コミュニティが整備されているか、その総和で学校の良し悪しが決まってくるかなと思います。

仁王小学校に行ったときに、ご父兄の方だと思うんですが受付とかやってくれてすごく燃えていました。この学校公開は学校と地域の連帯の中で位置付いているんだなと感じました。保護者の方々も先生方に協力できることを心地良く思っている様子でありました。双方向の関係が確立して

いるのかなというふうに思っていました。昔も地域の方々が学校に対して協力する姿は見られたのですが、現在の学校と地域の関係は方向性がちょっと違ってきているというお互いの役割を尊重しながら、対等に連携していくという形なのかなと思いました。そういう形が求められていることを学生の皆さんも知っていただければなと思います。繋がっていることが重要だと思います。

後でお話しますが、子どもの数も学校の数も先生の数もこれからどんどん少なくなってきています。全体が委縮傾向にあります。色んなことが委縮していても力を落とさないようにするためにどうするかというと、「繋がる」ということになります。職員室の中でも当然繋がっている、地域でも繋がっている、そういう繋がりの中でやっていくというリレーション方式という考え方が求められているということでもあります。

一方で、学校は多忙であると言われるかもしれませんが、その通りです。しかし、忙しい忙しいといってだれかが何かをしてくれることを待っていても何も変わりません。自分たちの仕事を改善するために工夫が求められます。私もそうだったんですが、まさに自己マネジメントだと。忙しい忙しいと無駄な時間を過ごしている自分に気付かないということもあるかもしれません。なので、そういう時間を上手にマネジメントできるようになるということが求められているということも振り返りながら確認していくことが必要です。

（2）復興教育とは

次に復興教育についてお話しをしたいと思います。岩手の復興教育にこの様に記載されています。「郷土を愛しその復興発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動として三つの教育的価値、いきる・かかわる・そなえるを育てる。」簡単に言えば、岩手の復興教育＝人材育成、人を育てるんだと。それではどうやって育てるんだかということになりますが、学校では様々取り組みを行っていますが、それを三つに分けますよと

言っています。「いきる」っていう部分と「かわる」っていう部分と「そなえる」っていう部分を意図的に学校教育活動の中に入れ込んでいき、そして育てていきたいと思います。

これについては、見たことあるでしょうか。県教委のホームページからダウンロードすることができますので、ぜひ参考にして欲しいと思います。各学校では工夫を凝らしながら積極的に取り組んで頂いていますが、心配なことは「風化」することです。現在は全ての学校で復興教育に取り組んで頂いていますが、十年、二十年、五十年、百年というスパンで考えた時に、未来の子ども達にもしっかりとこの思いが伝わっているかであり、被災地域には「ここより下に家を建てるべからず」みたいな石碑があったり、こういう時は「てんでんこ」だよ、とかいうものがきちんと示されているにも関わらず、そのことが機能しなかった部分も指摘されています。「継承していく」という責任と覚悟が私達には求められているということでもあります。

ここにあるのは、県立高校の校長会が出版した「祈り」の一部をコピーしたものでありますが、同様のものを小学校・中学校の校長会も作成しております。この中に「短歌で残そうこの一年」と言う項目で、宮古商業高校の二年四組のものがあります。いくつか紹介します。「みんな寝た一人ぼっちで考える 暗闇の中、明日は来るのか」「体育館 玄関先に母の姿 来てくれるって 信じていたよ」「寒い日に おっきな地震雪が降り 避難所で見ると 家族の笑顔」「雪が降り 月も照らしたあの夜に 願いは一つ 明日は来る」「心配は していなかったと 笑う父 その目に浮かぶ 涙に涙」「一夜明け 改めてみる頼もしさ 台所に立つ 姉の姿に」「やることは 何もないと 開くのは 真っ暗闇の 参考書」このようなこと考えながら過ごしていたんですね、高校2年生は。「もう二度と 会うことはない友人の 車の中から 私の好物」「がんばれよ 二度と聞こえぬその声を 夜空を見上げて 耳済ます日々」あとはヨット部の子どもでしょうか。「海のこと

嫌いになったはずだけど やっぱり好きだ ヨットが好きだ」「流されたものは たくさんあるけど 悲しくはない 命があるから」と。前向きにということですね。「人任せ 一年前の俺だった 今なら言える 僕がやると」、消極的だった自分だったけど今ならもう俺がやるというふうに言える自分になったんだという、こういう経験はそういう自分を生み出してくれたんだという話ですね。「今はもう 将来の夢 地元に残り 必ず復興 自分たちから」最後にします。「戻りたい 募る思いはあるけれど 私は今を 大事に生きる」というふうにその時から、行きつ戻りつしながら心が動く自分。そして未来を指向している自分というものが高校生の中にはあるのかなというふうに思って紹介いたしました。

岩手の復興教育（改訂版）の中で紹介されているものの中に、「支援する側される側という関係ではなくて、未来をつくる仲間になりましょう」という言葉があります。これは中学生の言葉からきているものです。P5に「岩手の復興教育と生きる力」の表題として、次のような記述もあります。これも子どもの言葉です。「私にはなりたい仕事があります。一つは病院の先生です。もう一つは学校の先生です。学校の先生になってこの震災津波のことを子どもたちに伝えたいです。」子どもたち自身がそういっているのであります。これに対して私達がどのように対応していくのかが問われているとも言えます。復興教育というのはこれからの岩手の中心になっていく考え方ですのでここで紹介いたしました。

(3) 見えてきた課題は何か

①心のサポートの問題について

それでは次に参ります。見えてきた課題は何かということでもあります。本当にいろんなものが凝縮された二年ということになっていったわけですが、心のサポートの問題というのが一番心配される場所でもあります。

年度始めに教育委員会内部では業務方針が示され、様々協議する機会があるのですが、その際、

教育長から講話をいただいたりするんですけど、その時にある日の岩手日報の記事について紹介がありました。読んだ方もいるかと思います。「被災地を歩く」という記事で高田小学校を紹介したものであります。「震災時に小学校一年生として入学してきた子どもが三年生に進級したが、学校生活について聞いてみると、学校が始まるのを楽しみにしていたと。だって友達に会えるから。全校児童の四割が今も仮設住宅で暮らし、一割が学区外から通うと。学校はちりじりになった友達が集まり思いっきり体を動かせる貴重な遊び場である。浸水した一階の床の張替が終わり二階へと続く階段には運動会や遠足、学習発表会といった学校行事の写真が壁一面に並ぶ。思うように進まない街の復興とは対照的に学校はすっかり日常を取り戻したように見える。」こういう記事だったんです。そして、「学校現場の悩みは尽きない。二月、ソロモン諸島沖の地震で津波注意報が出た際は鳴り響いたサイレンを聞いて泣き出す子がいた。盛り土工事の振動で校舎が揺れると一斉に教室が静まり返る。普段は生き生きとした表情を見せる児童だが、心の傷は二年で癒えるわけではない。校舎が復旧しても心の復旧は進まない。」ということだったと。そして教育長は本年度の教育委員会の大きな目標は、学び場の復興であり被災地のみならず全県が一体となって取り組んでいかなければならないという話で締めくくりました。

先週、私も実際に高田小学校を訪問する機会を得たのですが、正に壁には行事の写真が沢山貼ってありました。校長先生のお話によると、「家が流されて写真がないのでこの写真をほしいんだけど」という親御さんがいっぱい来るんだけど、なかなかそれに対応できないという話もしていましたし、ようやく一年が経過し、亡くなった七人の子ども達の写真を校長室に置くことができるようになりましたというふうな話を聞いて、過去と格闘しながら立ち上がろうとしている状況を垣間見ることができた気がしました。

昨年の十二月にも夕方に結構大きな地震があり

ましたよね。被災地の学校では、その時にびっくりしてしまったり座り込んでしまったり、津波が来るような場所でもない十分高い所にいるんだけれども、「もっと高台に行かなければならない。もっと高台に行かなければならない。」と高い所を目指して走り出した子どもがいたという話を聞きました。また、夜中に突然飛び起きて奇声を発して震えるなども何人かいたと。

日常の姿からは気付くことができない、何かをきっかけにフラッシュバックする子どもの姿がそこにあったということでもあります。だから被災後の切迫した状況は脱したものの、一見落ち着きを見せて安定しているように見えるが、それでよしという訳ではないと。阪神淡路大震災では三年から五年後くらいがいろいろあるよという話も聞いておりますが、それもうなずける状態が垣間見られたところでもあります。

そのような子どもの数は現在の所、そう多いわけではありませんが、きめ細かに見ていく必要はあります。沿岸に限らず、内陸部においても赴任した時に担任した子供がそういう状況になることも考えられるということなので、対処の仕方についても勉強していただければいいのかなというふうに思います。

震災に限らず私達が何か脅威にさらされたとき、どういうふうに対処していけばいいのか、その対処法が分かっていたら安心ですよ。どういうふうにしていいかわからない、例えば車を運転していた時に急に猫が飛び出してきた時、猫は動きを止めてしまいます。動物って何か困ったことがあると止まるという行動をとるそうです。固まってしまうということですが、その時の経験がトラウマとして残ってしまうというのはそういうところから発生するそうです。遭遇した事件とか事故の大きさや程度とかには関係なく、その出来事の前に自分が為す術がなく、どうしようもなかったというその無力感や虚無感、そういうものが心の傷になるらしいのです。特に小さな子どもであればあるほど非常に純粋な状況にあるので、そういうことに対して上手に対応ができないんだとい

うことで、大人になるにつれていろんな経験を踏んで理解できるようになるんだそうです。だから自分の脳と子どもの脳を一緒に見えてはいけないということでもあります。純粋な子ども達の脳にとってはあの体験はしんどかったんだ、ということを知っては知っておかなければなりません。ある程度落ち着いて物事を整理して考えられるようになったのならば、それを一つ一つ引き出しに入れるように、そういう体験を整理させることが必要であります。

臨床心理士の先生から伺ったのですが、「心のワーク」が効果的であるということを教えて頂きました。沿岸部では先生方がそういう手法を身につけてきているし、情報交換できる場があるんですけれども、内陸ではあまりそういう機会に恵まれないことから逆に心配であるという話を聞きました。内陸部の学校に転校して、その学級の中に被災経験をしている子が複数いれば、「あの時こうだったよね」って言えるんでしょうが、そういう時にうなずいてくれる子がだれもいないとすればどうでしょうか。辛くないですか？さみしくないですか？気持ちを共有できないというのは一番孤独を感じると。かえって、内陸にはそのような状況が隠れているという心配があります。「心とからだの健康観察」が全県で実施されて個人カルテのようなものがありますので、正に一人一人きめ細かに見ていかなければならないということでもあります。実は各地区の校長研修講座等で当時宮古でお世話になった校長先生と久しぶりにお話しした時、内陸で勤務している校長先生の中には、「当時のことは職員に一切話していない。」ということをお聞きしました。一方、宮古の校長先生とお話しした時、「内陸からいろいろな先生たちが入ってきたとき、当時の話をするとちょっと場違いな感じがするので言わないようにしている。当時の同僚と盛岡に集まって話しをした時、ようやく共有できた気がした。久しぶりにこういう話できたという感覚は、自分だけでなく周りの人達もそうだったことが分かった。」ということでした。先生方の中にも、そういうことを抱えながら

日々勤務している状況にあることを私は全く知りませんでした。ひょっとしたらみなさんのお友達の中にもそういう方々、またはご自身がそうだという方もいらっしゃるかもしれません。どうか、話を聞いてあげたり、話をするための時間を設けて欲しいと思います。

現在不登校の子どもというのは、増えていません。実は、不登校率は岩手は全国一位。少ないんです。千人いたら八人ぐらいという出現率であります。この結果から判断すると、子ども達が全国一学校に来ている県なので、これは絶対胸を張っていいことだと思います。それは先生方や地域の方、保護者が子ども達にそう接している成果ではないか思っていますし、本当に誇れることであると思います。

②体力の問題について

ここにグラフがあります。見にくいんですけども、小学校5年生で比較しているんですが、左上の方が被災前です。右下の方が被災後です。赤が女子、青が男子。100というのは全国平均を示しています。

グラフの目盛り方がちょっと異なっていますので、そのまま比較できないのですが、被災前の小学校5年生の女子は非常にいい状況でした。男子はまあまあ全国平均のところでキープしていました。被災後どうなったかということにグラフが小さくなってしまって縮こまった感じです。本県において、被災地の体力問題は最重点課題であり、今一生懸命取り組んでいるところであります。

全国平均以上の項目の割合で見ると、22年度が73.6%だったんですけども、24年度は41%になりました。以前は約四分の三の項目が全国平均以上だったんですが、被災後の24年度には、四割に減少したのです。七割五分から四割に減ってしまったのです。急激に落ちています。どうしてそうなったのかと思って調べたところ、放課後とか土曜日、日曜日の運動時間が減少しているということでありました。

学校の方では当然体育もやっているし、中学校

では部活なんかもやっているのだが、放課後家に帰ってからだとか、土曜日・日曜日というところで、運動できない状況になっているのかなど。運動する子どもとしない子どもが二極化している状況が見えます。中学校二年生の女子においては、一週間の総運動時間、体育

以外では一時間にも満たないというのが四人に一人の状況であります。ほとんど運動していないということでもあります。中学校二年生の女子が運動していない…大変ですよ。動いて体を作っていく大切な時期なんです。そういう状況が見えてきました。遊ぶところがないとかそういう土地がないという状況にもなっていると思うんですが、それを嘆いても何の解決にもならないので、いずれ体育の授業等々でカバーしていくことが急務であります。狭いスペースでも、短い時間でも、体力向上を推進していくような方法を学校の中に取り入れて。できれば地域の方々にも手伝ってもらいながら作っていかねばならないのかなど。非常に大きなポイントであります。

③ 確かな学力

これも、この指針の中に記載されていますが、「確かな学力」とは一体何なんだというところからあります。確かな学力があるということは、確かじゃない学力ということもあるんですよ。みなさんどうでしょうか…。確かな学力と確かでない学力の違いを述べよといわれたらどうします？何が違うんでしょうか。いろんな見解があるのかもしれませんが、文科省が言っていることをベースにすると、学力の要素として三つ言っています。「基礎的な知識技能」これはすべての子どもに定着させましょうと…。きめ細かな指導を通して、みんなができるようにしましょう、身につけさせましょうよというものであります。二つ目なんですが、知識技能を活用するための「思考力・判断力・表現力」というものです。この力が現在重視されてきています。問題解決的な学習・探究的な学習を通してですね、思考力・判断力・表現力をつけさせましょうと。結果、使える学力

にしていきましょうということです。三つ目は、「学習意欲」です。学び続けること。知識技能を身につけながら、思考力・判断力・表現力を通して探究して課題を解決し、その時の達成感が次なる課題解決意欲につながり、主体的な学習を持続していく…。そういう学習のサイクルを意識したものであります。学び続ける人にしましょうということでもあります。

本県は今まで、基礎基本を重視し、全ての子どもたちにその力を身につけさせましょうとしてきましたが、これから考えていかなければならないことは、活用型の学力についてどのように対応していくかということでもあります。先ほどお話しした確かな学力を身につけさせるためには、課題解決や探求していくそういう力までに伸ばしていく、繋いであげる必要が出てくるということです。現実の社会というものは、教科のように分けられて進んでいるのではなく、横断型・融合型で進んでいると言えます。ですから、子ども達にも、小学生・中学生、各発達段階に応じて確かな学力を身につけさせるような学習指導が必要になります。その学習状況を知るひとつの方法として、PISA型学習とか全国学習B問題とかがあります。

みなさんB問題解いてみましたか？私も解きましたけど6年生の問題でも間違えてしまいました。問題を紹介しますが、これは今年の小学校6年生算数の問題です。こんな問題を解けるように指導していくことが、確かな学力に繋がることになります。「ゆりえさんとひさこさんが遊園地に行く計画を立てています。ゆりえさんとひさこさんは乗り物券を一人8枚ずつ買う予定です。この遊園地の乗り物と乗るために必要な券の枚数は次の表のとおりです。ジェットコースターを乗るためには5枚のチケットが必要です。観覧車は4枚です～というような内容になっています。メリーゴーランドは1枚で乗れますよ。2人はそれぞれ下の乗り物にのる計画を立てました。ゆりえさんは観覧車とメリーゴーランドに乗ろうかなあと。ひさこさんはジェットコースターとコーヒーカップに乗るぞと。2人はまだ乗り物券が残るので他に

乗る乗り物を下のように考えました。箱の中には、残りの乗り物券で乗る、買い足さない、2人とも選んでいない乗り物に乗る、2人で同じ乗り物に乗る、などの条件が示された上で、2人はどの乗り物に乗ることができますか。答えを書きましょう。」という内容であります。1 + 1はいくらですかという話じゃなくて、日常の中にあるような、例えば「今度の日曜日にパークランドに行ったときにどうしようかな」というやつなんです。次の問題では、乗り放題券なんかも出てきています。このように考えさせる内容のものが活用型問題と言えます。今こういう問題を解けるようにすること、子どもたちの思考を耕すことが教員には求められているということでもあります。これを私達は理解しなければならない。

本県の子ども達の特徴としてですね、記述式やちょっとやっかいな問題になるとすぐ諦める、やろうとしない傾向があることが指摘されています。指示されたことに対しては非常に従順に取り組みますが、主体的に進めていく形態の学習とか、学習そのものに興味を持ってのめり込んでいく力とか、「考えることがおもしろいなあ」ということへの貪欲さのようなものが欠けているのではないかという心配です。難解な問題に対しても瞬発的にぐっと入り込むとかですね、そういうのがちょっと欠けている部分があります。その原因を探りながら、対応していくことが求められます。

例えば、スポーツに当てはめて考えると、練習試合で左利きだったり右利きだったり、変則的なプレイヤーだったり、いろんなものにあたることによって対処の仕方が分かってくる。いつもオーソドックスなプレイヤーとばかりやると、そういうスタイルの選手には勝てるかもしれないが他のプレイヤーには歯が立たないし、対応できない。みたいなどころがあります。

基礎基本の徹底だけでは、活用する力まで育てることが難しいということであり、指導者である私たちがいろんなプレイヤーになって子どもたちに様々な課題を提供しながら、対応力を養い、課題を乗り越えた時の喜びを味わわせるということ

を意図的に仕組んでいくことが求められていると言えます。だから、子どもたちに記述式や難しい問題に挑戦せずに諦めてしまうという実態があるとすれば、それは子どもたちのせいではなく私達の中にあるんだというふうに考えていくのが正論かなと。課題解決の中で試行錯誤させる、考え抜くという経験をさせる。できたという喜びを体験させる。そういう実践を45分、50分の中で積み重ねていく。

時間が無くてそんな授業ができない。というのではなくて、先生方の説明の時間を短くするとか発問を吟味するなど、工夫が求められるということでもあります。三年生は既に教育実習が終わっているのですが、自分の授業をビデオやICレコーダーに録ってみると、まず八割自分がしゃべっていますから、よくよく授業分析すると、結論として先生のしゃべり過ぎてことが多いものです。自分の癖は中々気付かないものです。ビデオにとって客観的に見て分析するといいいのかなというふうに思います。

基礎基本の定着についてという話しはよく聞きますが、そこにゴールがあるわけではありません。そこがスタートなんです。基礎基本を定着させながらB問題のような課題に向かわせ解決させる。そういうストーリーが先生方の中に構築されることが大切であります。基礎基本ができて丸がついて90点だったと満足させるのではなくて、本当に世の中で使える力に育てていきたいと思います。

A問題、B問題の相関関係について調べてみました。A問題の基礎的な知識技能が身に付いていれば、B問題の活用もできるようになるのが普通の考え方ではありますが、A・B問題の正答率をそれぞれ縦軸・横軸において分析してみると、「A問題B問題どちらもできる」を目指していますが、「A問題ができなくて、B問題ができる」というものや「A問題ができて、B問題ができない」という傾向の学校も見えてきます。この状態を学校がどう分析するかということですが、特にも、AができてBができないという傾向の学校が多い

という実態から考えられることは、知識技能についてはある程度定着しているんだけど、活用する力として育っていないということです。これは教え込みだったり、仕組み等が理解されておらず、答えが出るまでの過程を無視して、暗記中心に学習が進められているのではないかということが危惧されます。

繰り返しになりますが、基礎基本の力が転化しない、転移しないというかくつついていかないみたいな。もしAがいいんだけどBができないというのであれば、どうしてそうなっているのかというのは学校としてしっかり分析してみた方がいいですよという話をしています。しつこいようですが…。

今までは、「何を学んだか」というのをテストで見るが多かったわけですが、これからは「何ができるようになったのか」を見取るための機会としていこうという考え方があります。教員採用試験なんかもそうです。私は大学生活でこんなことをしてきました。サークルでこんなことをやりました。部活ではキャプテンをやりました…。これは実績を示したもので事実であります。それは素晴らしいことです。しかし、そのことが教員になってそういう力を発揮できるということとイコールなのでしょうか。ひょっとしたら面接ということになればやってきた実績に加えて「これから何ができる私なのか」を証明していくことが求められるのかもしれませんが。未来志向のその上にある何かを求められるかもしれない。何かで表彰されたという実績は過去のことです。

活用型というのは未来を生き抜く子どもたちにそういう力をつけてやるのだという発想です。例えば数学を教える先生がいるとします。それは子どもに数学を教えるということではなくて、数学を学んでいる子どもたちを支援する人という捉えです。主体は子ども達、数学を学ぶのは子どもなんです。教えるということと支援するっていうちょっと角度が違っているということになっているということを理解して頂きたいと思います。

先日、宮古教育事務所管内でキャリア教育の研

修会が実施され、その報告を受けました。地元の高校を卒業して、そこからたたき上げで社長をしている方の講演会があったのですが、その方が先生方にお話をした内容です。その社長さんは「いいものを安く作らないと、声もかけてもらえない。」というのが持論で、宮古で金型の仕事を立ち上げ世界に通用する工場を経営している方です。どうしてそんなに素晴らしい工場がそんなところにあるのか、やっぱりトップの社長さんが頑張っているんです。だからこそ重い言葉です。「いいものを安く作れないと声もかけてもらえない。でも、いいものを安く作れば世界は待っている。相手にしている市場はサムスン、アップルなんです。これらの機器の中身は7割がメイドインジャパンなのだ。」ということでした。知りませんでした。「日本は日本のやり方で世界を席卷しようとして失敗した。サムスンやアップルは他国の文化を理解し利用した。今世界は一つになっていて、お互いに知恵を出し合うのが今後のグローバルスタンダードだ。その際に、学力の差が国力の差になる。平均点ではだめだ。内輪の理論ではだめ。人の成長が社会・地域の成長だ。二十一世紀を生きるための生き抜くための意識改革は不可欠。もう取り残されている。」

加えて、こんな話もありました。「問題解決能力のほとんどが小中学校での知識経験によるものである。問題解決のベースは義務教育にある。だから小学校の先生、中学校の先生は頑張りたい。むずかしい話じゃないんだ。失敗から学ぶ姿勢が大切だ。失敗事例は財産だ。隠ぺいは億の損失を生む。隠しちゃだめだ。失敗していいんだ。失敗してこんなこと気づいたラッキーっていわなきゃだめなんだ。で、失敗して叱られることを恐れて正直に話せない職員がいる。この経験は学校で身につけてしまったんじゃないか。失敗して叱られることを恐れて正直に話せない。失敗は成功のもとだという教育をしないからそうやって隠す社会人になっちゃうんだよ。社員の現状として、学力が低下している。間違った平等感、競争意識の間違い。なんでも一緒だよってちがうだろ。欲

がない。どうにかしてやろうっていうのがない。現状打開を怖がる。前例踏襲に走る。前例踏襲はあなたでなくてもいいでしょということ。あなたが見えませんか。あなたはもういないよということだ。必ずどっかを修正して、自分らしさをプランニングしてもっていかないと…。」厳しい中にも納得する内容でした。

この話から私が学んだことは「仕事とは自分の可能性を試す手段であり自分をアピールする場が仕事である。」と言うことであります。大切にしたいキーワードとしてはですね、感性と創造性、感じる心ですね。あとは何かを創っていく力、創造性。感性は小さな変化に気付くことだ。創造性は規格から外れることだと。どんどん違うことを考えていきなさいということでしょうか。民間企業だけに言えることではなくて、教育にあっても通じる考え方が含まれます。教育においては不易と流行という部分もあるのでイコールではないかと思えますけど、こういう考え方はすごく刺激になると思えますし、もっともっと私たちは殻を破って、様々なことに挑戦する姿を子ども達に示していくことがあっていいのかなと思いました。

4 今、何が求められているか

(1) 少子化・教職員のいびつな年齢構成

教職員の年齢構成、これを見てください。左側にずれている紫色の山が平成19年度の教職員の年齢分布です。次の茶色の方が23年度ですので四年経過しました。これで何を見取るかということ、年齢が大分右側の方に移動している、だいたい47、8歳になっています。採用されて学校に行くと、職員室は四十代・五十代だけという学校はいっぱいあります。びっくりしないでください。学校では若手職員を要望する声大きいのも事実であります。だからみなさんのような方がいっぱい入って欲しいと思っている学校も多いのです。一方、7、8年後、この山がずっと右側に行きますから、一番高い所ここが350人いますが、あと10年もすればですね、350人も退職してしまうんです。ということは採用が350人。ただ、子どもの数が減る

ことで学級数も減りますので、採用はイコールではありません。しかし、今よりはどんどん採用数が増えていきます。そうすると、岩手では採用者を確保するための手立てを新しく取っていかねればなりません。今年度から現職教員の特別選考が実施されます。それでも足りなくてもっと受験してくださいという時代がそこまで来ているという状況があります。

(2) 若手教員に求められるもの

一方、採用になった若手の方々には、即戦力として働いてもらえる方であって欲しいという現実もあります。今は採用数が限られているので結構手をかけながら育てている状況ではありますが、そうはいかなくなり、即戦力となる人材を求める傾向が強まります。

現在の初任者研修は、一年で実施していますが、課題として一年目の研修が過密スケジュールなのに対して、二年目三年目は何もなくなってしまい、全て一人でやりなさいと突き放されるようなことになり、アンバランスではないかという指摘があります。よって、来年度からは研修を三年間の中で計画的に進めていこうということになります。初任者研修にゆったり感がでてくるのかなという気がします。こういう状況だということをお知らせしておきます。

次に表が小さくて見えにくくて申し訳ありませんが、ここに示している数字は、学校数、児童生徒数、教員の数です。実はここに学校数がありますが、ここにマイナスという数字が入っています。どれだけの学校が統合によって少なくなっているかが分かります。だいたいアベレージで20個くらいなくなっています。すごい勢いで学校が統廃合でなくなっています。減少率にすると3パーセント前後で推移しています。今後も同様の状況であると予想しています。児童生徒数もありますが、その隣のマイナス、ここです。だいたい2000人以上が減っています。昨日学校公開した仁王小学校が431人くらいですか。仁王小学校4つ分くらいがだいたい減っていると、毎年ですよ。それくらい

の子どもの数が減っていると。一方教職員数は減っているかという、実はあまり減っていないです。なぜかという、少人数加配とかです。被災があった関係で、復興加配ということで先生を減らさないという状況があります。学校が減って子どもの数が減っている割には先生の数が減っていないので、少人数のきめの細かい授業ができていくということでもあります。

次に採用状況について紹介いたします。22年度から25年度まであるんですけども、小学校は22年度は539名受験者がいたんですが、25年度が528人、あんまり変わっていません。中学校は平成22年度488人、25年度510人というふうに500前後となっております。合格者数ですが、平成22年度は24人だったのが、平成25年度は57人になっています。中学校は平成22年度37人だったのが、平成25年度は56人と増えました。倍率でいくと、小学校平成22年度22.5倍。22人に一人しか合格できなかった。ところが、今年度は9.3倍10人に一人くらいという状況です。中学校は13.2倍が9.1倍になっているので、少しずつ採用数も上がってきているということがここで読み取れます。

今年度の状況はというと、どんどん受験者の数が減ってくるのではないかと心配していたんですが、小学校はあまり様子が変わらないかなと。中学校は、教科によっても様々ですが全体的に減少傾向ですので、たくさん受験してもらえよう県としても努力していかなければならないと考えています。みなさんも含め、気持ちのある方は取り組んでいただければと。

即戦力を期待していますよというお話をさせていただきましたけれども、指示待ちで何かを与えてくれるのを待つようではやっぱりいけないだろうと。とにかく失敗を恐れず様々なことに率先して挑戦していくあなたたちであってほしいなというふうに思います。ここに教員採用試験の案内がありますが、昨年度採用された方々の勤務ぶりを紹介していますが、来年は皆さんの中からこの冊子で紹介される方々が沢山できるように頑張ってください。

ここでは、本県が求める先生方として次のように示しています。「実践力と行動力のある先生」と「人間性の豊かな先生」と、「情熱あふれる先生」というふうにコメントされています。

それでは、どうすればそうなれるのかと。ここが問題だと思います。人間性豊かな先生ってどうすればそうなれるのでしょうか。「実践力と行動力のある先生を求めているのですが、あなたの行動力と実践力について聞かせて下さい。」何て答えますか？現段階として、こういう自分になるため、こんな取り組みをしています。明確に答えることができればいいのですが、中々大変なことがあります。岩手に限った話ではありませんが、本採用になるために、どのような準備をしてきたか、その事実について語るわけです。まず過去を聞くわけです。あなたはどんな準備をしてきましたか。その上で採用になったらあなたはどのようなふうになりますか。「私は…」って言えるものを作っていかなければなりません。それは抽象的なことではなくて、具体的なもので語ることが必要であります。まだまだ時間はあるのでそういう時間を過ごしていただければと思います。

実は宮古教育事務所にいるときに、岩泉の方に岩手大学のみなさんに来て頂いて、長期休業中に子ども達のサポート事業を実施して頂きました。子ども達にプール指導とか学習指導とか面倒を見てもらっているのですが、その様子を見てみると、大学生の皆さんはこの経験を通して、子どもの実態とか課題とかを、書物ではなくて自分の体を通して見つけているのかなという印象を受けました。学生さんにとっては本当に貴重な経験なんだろうと思って拝見させた頂いたところでありました。これからでも、様々なところで同様の経験はできると思いますので、座学だけではなくて色々な所に飛び出して欲しいなと思います。

将棋の羽生さんの著書の中にですね、「知識は陳腐化しても経験は無駄にならない。」というのがありました。「役に立つのは直接的な知識や技術というよりもそれを身につけるに至ったプロセスだ」とも…。簡単に身につけたものは簡単に失

うものだが、苦勞して身につけたことは活性化して転移可能な知識・技術となるとだと思えます。だから苦勞して身につけるといことはやはり大切なんだということでもあります。世の中はどんどん便利になりますが、簡単なことを簡単に扱ってはいけない。苦勞するところは苦勞しながらというふうに使分けることが必要になるのかなと思えます。樂を求め過ぎないことですね。苦しいな、眠いな、大変だな、でも気持ちいなあと思える自分を作って行くこと、大変なことではありますが「今俺って伸びているかもしれないなあ」と、苦勞を樂しむぐらいの余裕というのがあるといいですね。難しいことですが…。

目的意識ということが大切なんだと思えます。「何のために」というのを見失うと辛くなります。今本気で先生を目指す人がいるとすれば、「先生になる」ということを目的とせず、「子ども達に大きな成長を与えることができる先生になる」ことを目的にすれば、先生になってしまえばもう終わりではなくて、先生になったことはスタート地点に立っただけであり、新たな目標ができるということになります。自分の中にどんな目標を設定するかが重要であります。

八十歳で三度目のエベレスト登頂に成功した三浦雄一郎さんにも驚きでしたが、山にまつわる話としてこんなものがあります。「一人目の山登りに、なんで山に登るんですかと聞いたら、山に登ることが好きだからと。二人目には、なんで山に登るんですかと聞くと、山に登ると王様から報奨金がもらえて仕事を授かることができるから。三人目の山登りは、山に登ることによって町の人たちに勇気と希望を与えることができるから」と…。そして三人は遭難しちゃったんです。そしたら一人目はですね、自分の好きな山で死ぬんだから本望だと。二人目は、俺の人生はここまでだったかと悔しがったと。三人目は、自分が山に登らなければみんなに勇気と希望を与えることができなくなると。目的意識の違いですよ。遭難してもちゃんと戻ってきた山登りが一人いた。だれか分かりますよね。

みなさんはどうして先生になりたいのか。そのためにすべき準備は何か。いつ頑張るのか。いつするんですか。今でしょ…。

5 おわりに

二年前に東日本大震災が発生し、その五か月後に全国中学校文化祭という全国大会を開催しました。このタイミングで本当に開催できるかなと半信半疑であったのです。その時に予定されていた様々な全国規模の大会がキャンセルになった時に、全国中文祭は実施をしたのです。遠くは沖縄からも中学生がやって来ました。そういう時に、岩手の中学生がホストになって全国の中学生を迎えました。キーワードが「おもてなしの心」ということでした。地元の中学生在が、同じ年の子どもたちを迎えようと頑張ったのです。それがこれまで支えてくれた方々への恩返しであったのです。その姿を見て私は大変感動し、中学生から学ばせてもらいました。

「もてなす」の語源を調べてみました。「持つて、成す」。何かを持って何かを成しとげる。その「持つ」というのは食べ物とか飲み物もあるのですが、形として目に見えないようなもの、心のようなもの意識のようなものも含んでいるそうです。また、もてなすというのは「表なし」ということで、裏側だけ、黒子として裏方に徹するという意味もあるそうです。他人を思いやる「利他の心」を示しています。人のためにということがあります。

話は変わりますが、おもてなしの心を一番大切にするとところとして、ディズニーランドがあります。みなさんの中には既に聞いたことがあるという人もいるかもしれませんが…、ディズニーランドの精神としてすべてのゲストに幸福感を届けることがあります。読ませていただきます。ちょっと長いんですが…。「東京ディズニーランドにある若い夫婦が訪れました。そしてディズニーランド内のレストランで「お子様ランチ」を注文したのです。もちろんお子様ランチは9歳以下とメニューにも書いてあります。子供のいないカップル

に対してはマニュアルではお断りする種類のものです。当然の如く、「恐れ入りますが、このメニューにも書いておりますが、お子様ランチはお子様用ですし、大人には少し物足りないかと思われまますので…」と言うのがマニュアルです。しかし、アルバイト（キャスト）の青年は、マニュアルから一步踏み出して尋ねました。「失礼ですが、お子様ランチは誰が食べられるのですか？「死んだ子供のために注文したくて」と奥さんが応える。「亡くなられた子供さんに！」とキャストは絶句しました。「私たち夫婦には子供がなかなか授かりませんでした。求め続けてやっと待望の娘が産まれましたが、身体が弱く一歳の誕生日を待たずに神様のもとに召されたのです。私たち夫婦も泣いて過ごしました。子供の一周忌に、いつかは子供を連れて来ようと話していたディズニーランドに来たのです。そしたら、ゲートのところで渡されたマップに、ここにお子様ランチがあると書いてあったので思い出に…」そう言って夫婦は目を伏せました。キャストのアルバイトの青年は「そうですか。では、召し上がって下さい」と応じました。そして、「ご家族の皆さま、どうぞこちらの方に」と4人席の家族テーブルに夫婦を移動させ、それから子供用の椅子を一つ用意しました。そして、「子供さんは、こちらに」と、まるで亡くなった子供が活着しているかのように小さな椅子に導いたのです。しばらくして、運ばれてきたのは三人分のお子様ランチでした。キャストは「ご家族でゆっくりお楽しみください」と挨拶して、その場を立ち去りました。若い夫婦は失われた子供との日々を噛みしめながら、お子様ランチを食べました。このような行為はマニュアル破りの規則違反です。しかし、東京ディズニーランドでは先輩も同僚も彼の行動を咎めません。それどころか彼の行為はディズニーランドでは賞賛されるのです。マニュアルは基本でしかありません。マニュアルを超えるところに感動が潜んでいるのです。この出来事に感動した若い夫婦は、帰宅後に手紙を書きました。「お子様ランチを食べながら涙が止まりませんでした。まるで娘が生きてい

るように家族の団欒を味わいました。こんな娘との家族団欒を東京ディズニーランドでさせていただけとは、夢にも思いませんでした。これから、二人で涙を拭いて生きて行きます。また、二周忌、三周忌に娘を連れてディズニーランドに必ず行きます。そして、私たちは話し合いました。今度はこの子の妹か弟かをつれてきっと遊びに行きます。」と言う手紙が東京ディズニーランドに届きました。このような感動した内容の手紙が東京ディズニーランドには連日届きます。そして、直ぐに貼り出され、コピーされ、舞台裏で出演の準備をするキャストに配られます。舞台裏ではキャストとして働いている多くの男女の若者が共感して泣くそうです。」というような内容であります。この対応したキャストというのが、数か月しかそこで経験していない人。でもディズニーランドの全ての人に幸福を与えるというのが染みついている。だからいろんな状況に出会っても、自分がどう動くことが幸せを届ける行為なのかということで行動が決まってくると。マニュアルではなくて精神、目的がその人には身につけていたと。経験の長短だけで判断するものではないということでもあります。

学校であっても同様のことが言えるわけで、仮に経験の浅い若い先生であっても、「何のために」という軸が定まっていれば、価値ある行動をとることができるということでもあります。おもてなしをキーワードにして取り組んだ岩手の中学生も素晴らしい訳ですけれども、そのような子ども達を育ててきたのも本県の先生方、教育であったということでもあります。今後若い方々がたくさん採用される時代が来ることが予想されるわけですけれども、本県教育がこれまで培ってきたものを継承しながら、そして、新しい時代へ対応する力も身につけていかなければならないのかなというふうに考えています。

中国の古いことわざの中に、「明日をよくしたかったら花を植えなさい、一年後よくしたかったら稲を植えなさい、十年後をよくしたかったら木を植えなさい、百年後をよくしたかったら人を育

てなさい。」で、教員を目指すということは百年後の未来に繋がる仕事ということでもあります。非常に価値ある仕事であるということで、是非みなさんには私たちの仲間にも一日も早くなっていたらいいかなというふうに思っております。以上で終わらせていただきます、ありがとうございました。

新沼：佐藤課長さんには、およそ90分に渡りまして、熱く語っていただきました。90分という時間が本当に短く感じるほどすばらしいお話をいただきました。さて、ここですね、ご質問、あるいは感想をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

先程、佐藤課長さんからもお話がありましたように、岩手県の小中学校全部でいくつありましたでしょうか。平成25年度、今年度は535校ありましたね。その今トップリーダーとして仕事を進めている課長さんでございますので、なんでもどんな質問にもお答えできますので、どうぞ遠慮なさらずにご質問いかがでしょうか。どうぞ、では、先生お願いします。

新妻先生：心のサポートの問題について、数が予想したほどではないけれども、場合によっては不安定な症状を出すという子がいるという状況は、そのような児童生徒はどれだけいるのでしょうか。もし具体的な数字をご存知でしたらお願いします。

佐藤先生：具体的な数字はつかんでいないんですけども、当初、県外から多数の臨床心理士の方々に入って頂きましたが、これだけの規模の出来事の場合には相当数の子どもがどのような状態になるのかなと心配されたのですが、その予想を大きく覆す状況だと。「こんなに少なくないのかな」と思うほどだということを言われました。

阪神淡路のときの経験を踏まえて初期対応が

うまくいったということと、専門の方々が入ってくることによって現場の先生方も安心して適切な判断ができるような状況をつくってくれたということが大きかったと思います。ただ、今安定しているのかのようには見えませんが、表に出ていない部分ですね、今後どうなっていくかとなると、まだまだ心配される状況なので、数字では一概に言えないところがあると思います。非行等の生徒指導上の問題なども、自暴自棄になったり無気力になったりとか、数は少ないものの、課題であります。そのことが若干見えてきている状況もあり、「心とからだの健康観察」というのがあるんですが、何かあった時にそのカルテをひっくり返して見たりするのですが、確かにそういうシグナルが見えるということもあります。子ども達の記述を軽く見て判断するのではなく、しっかりと見取っていくきめ細かさが、今後益々大切になってくると思います。今までは本当に大変なものに着目していればよかったのですが、グレーとか判断が難しいところにも目を向けていかなければならないと思います。それをどっちにカウントするかによって支援すべき子どもの数は大きく変わってくるのではないかと思います。全県的に見ると、著しく大変だという状況ではないという認識しています。

花巻の矢沢中学校：被災地の子どもたち、あるいは被災地からこちらの内陸の方に転校せざるを得ない子どもたちは精神的な負担を抱えていると思うのですが、その子にもだいたいのサポート、スクールカウンセラーの方々がお見えになって、指導していただいた状況なんです。これから新しい先生方が増えてくるにあたって、そういう新しい職場現場での環境の中で新人の初任の先生方が、そういう先生方と手を組んで、子どもたちをメンタルの面での指導を中心に進めていかなければならない環境だと思うのですが、やはりそういう

プログラムを初任期とかこれから新しいプログラムをお考えになっていると思うんですけども、そのあたりをお聞かせ願えればというふうに思っております。よろしく願いいたします。

佐藤先生：今先生がおっしゃられたとおりであります。実は学校現場がどのような状況になっているのかについての把握は、十分ではないというところもあります。様々な研修会等の際に「実は学校現場ではこうですよ。」という形で情報を頂いたりしてという場合もあります。対応についての具体的なプログラムについては現在はまだ考えていない状況ですが、もちろん初任研では概略的なものは盛り込んでいます。

今後、先生方の部分についてはもう少し情報交換をし合えるような、同僚性という話はよくするんだけど、実際そういうことを言い合えるような状況になっているのかというところとちょっとまだなところがあるので、お互いに話し合える状況をつくることからスタートなのかなと思います。子どもについては「心とからだの健康観察」等について、とにかく精査していただきながら活用するということがかなというふうに思います。今ご意見いただいたので、復興担当の方にもお伝えしておきます。

鈴木さやかさん：岩手大学教育学部の鈴木さやかと申します。本日はありがとうございました。これから復興教育を進めていく中で、現場の先生方の中で、自身が被災したりという方が多くいらっしゃる、また実際に単身赴任などで沿岸に行かれて自分がストレスを抱えたりという部分があると思います。それに対して教員の方々に対してのサポートがどうなっているのかお聞きしたいと思います。

佐藤先生：これについては、県の教育委員会の方

でも厚生福利という担当があってそこで大人の部分のメンタルヘルスを当然発災当時からやっております。個人的にカウンセリングを受けたいといった場合にはそういう窓口もありますし、あとは校長先生を中心に元気がないあといった先生がいる場合には校長先生を通して学校にカウンセリングや相談ができる人を直接訪問して、個別に面談をします。必要であれば医療機関に話を通すということは細かくやられていますし、全国各地から臨床心理士さんがきています。子ども中心ではあるんですけども、当然先生方の中にも心配する方がいれば、別枠で臨床心理士さんに聞けるということがあるので、何か月もそういう状態で放っておかれることはないです。まず自分の方から声をあげていただく、または管理職の目から見て不安な先生にアプローチしていただくということはシステムとしてはある程度確立されている。みなさんなんかはまさに初任でもしそういうところに配属されたときに、不安感があるといった場合にも初任研の時、あるいは指導主事、先輩なんかに声をかけてもらったり、悩み相談をできるようになっていますので、そこは安心していただければというふうに思います。

学部長：先程のお話の中に、今後教員需要自体は統廃合はあるけれども、のびていくと予想されているのですが、年金支給が65歳からいわゆる年金支給率が完全65以上です。そうすると、先生方の60歳退職が、いわゆる再雇用ということで65まで延長すると。そしてその比率が1年2年であればもういいやということもあるんでしょうけれども、5年となると退職から支給が遅れるということになるのですが、多くの方がエントリーすることになるのですが、新しく採用する先生、再雇用する先生とだぶるときがあるのですが、だからといって若い先生を雇わないわけにもいかないので大変厳しい現実があると思うの

ですが、そういった動きはでてきているのか、あるいは近々決めることになるのかその辺の状況についてお知らせいただければと思います。

佐藤先生：さすが、マニアックなというか…。私、義務教育課長なもので、直接関係することではないんですけども、なので、そういう立場の人間として話を聞いていただければと思いますが、来年度はそういう状況になってくるのではないかということで、少し調査しているところはあるようです。どれだけの数の先生が再雇用というか。ただ、現実的に61歳の方を再雇用して、常勤で勤務していただけるかというところとちょっと別で、希望する方々がどれくらいいるのかというところを見ながらということではあります。若い方々の雇用を著しく圧迫することにはならないのではないかと思います。影響が全くないとは言えませんが、試算しながら全体的な状況を見て、検討していくことになります。今ちょうどその最中でありまして。

新沼：ここで閉会の方に入りたいと思いますけれども、井上センター長より謝辞を申し上げます。

井上センター長：どうも佐藤先生、長い間ありがとうございました。ディズニールンドの話、個性ある社長さんの話、それから復興のお話、いろいろと聞きました。そしてさらにご親切に、試験に関する内容まで非常にありがたいお話でした。先生をお見かけしていると、いつも笑顔を絶やさないような先生ですので、非常にみなさんも安心して岩手の教育に飛び込んでいくことができるのではないかなというふうに思っております。今日は大変ありがとうございました。ご参加のみなさんもありがとうございました。

8月27日 教育講演会 吉成信夫さん

木村先生：今日は雨が降ったり晴れたり、変な天候ですけども、平日のこの時間にたくさんの人に来ていただき、ありがとうございます。（ ）大学教育学部では、毎年教育推進委員会というところが母体になりまして、学部が主催する（ ）となりました。近年ではなるべく学部の教職員だけではなくて、一般の方にも来ていただけるような企画をとということで、一昨年は畠山（ ）さん、それから昨年場合は映画の上映会（ ）という（ ）の映画の上映会を従来とは思考を変えてやってみましたが、今回は地元岩手の非常に有名な（ ）のご先生をお呼びして、企画することがありました。吉成先生のご紹介を兼ねて、学部長の方から一言ご挨拶をしたいと思います。新妻先生よろしくお願ひいたします。

新妻先生：はい、みなさんこんにちは。今日はお忙しいところ吉成先生の講演会においでいただきましたことに、まず感謝を申し上げたいと思います。まずこの企画についてのご説明は木村から話されたとおりでですけども、毎年企画しているものです。この推進会自体はですね、こういった企画の他に、学部の先生方の研究の成果であります、研究年功の発行等も担当している委員会でありまして、今日は私どもとしては子どもたち、それから全体で言えば広い意味での教育に、研修会を合わせてやるということで、本年度は吉村先生をお呼びしてのこういう企画になっているということでございます。みなさんのお手元に、森の子育て研究センターという小冊子が入っていると思いますけれども、これを元にしながら、吉成先生のご紹介を兼ねていきたいと思ひます。吉成先生は1956年の東京のお生まれということで、何歳・・・？（56です）とい

うことでございます。いろんな活動をやっ
ていらっしゃるといのはお手元の資料にもあ
るとおりですけども、岩手との繋がり、関
係といのは1996年に岩手県の現在は一関市
になっておりますが、東山町に「石と賢治の
ミュージアム」という施設がありますが、そ
この研究専門員としてご来県されたあと、現
在に至るといことになります。その途中で
すけれども、活動を展開・企画されていると
いことで、代表的なもの、今日のお話のメ
インテーマでもありますけれども、2001年度
から葛巻町の（ ）という地域です
けれども、そこの地域の廃校を利用しての「森
と風の学校」といものを開設し、現在多く
の活動を展開中だといことは後でいろいろ
なお話の中で詳しくご紹介いただけると思
います。加えて、岩手県立児童館、一戸にあり
ますけれども、「いわて子どもの森」の初代
館長として8年間という長きに渡って現在の
こどもの森の活動の基盤あるいはシステム、
実際的な活動のプログラム等々をお作りにな
って、現在こどもの森は先程吉成さんともお
話したのですが、私事ですが孫がこないだ
東京から来たんですが、こどもの森に行く
といことで、なんで東京にいてこどもの森を
知っているんだといふうに聞いたら、東京
にいる子育て仲間の方から聞いたと、お父
さんからは聞いたことがないといふうに言
われたりして、地元のことは地元の人
が知らなくて、逆にそういった関心をも
っている、子育て真っ最中のお父さん
お母さん方にとっては非常に岩手の宝
じゃなくて全国の宝のように感じ取ら
れている施設でもあり、活動の場所
でもあるんだなあと認識させられたけ
れども、館長を先程ご紹介しましたよ
うに8年間やって現在の基盤づくりに
貢献していただいたと。現在は森と
風の学校の関わりで、子ども環境研
究所理事長、それから森の子育て
研修センター長としていろいろご活躍だ

注. () 内はテープ起こし聞き取り不明。

ということなのですが、最初にご紹介の中でお話ししましたように、石と賢治のミュージアム、それと森と風の学校というネーミングで分かれていますけれども、おそらく吉原先生のお考え、あるいは理想・理念の根底には宮沢賢治さんがいらっしゃるということと同時に、目線が（親身）、住人目線と子ども目線に立って、循環型の社会を作っていくということが非常に読み取れるような活動ではないかというふうに私自身は受け止めています。このほかに、実は県のあるいは市のさまざまな市議会、委員会の委員さんもたくさんやられていて紹介するには時間が足りないくらいたくさんあるということと同時に様々なこういった講演会等はもちろんですが、新聞等、テレビ等でも連載があったり、ということで、まさに（ ）のご活躍されている先生だということでご紹介にしたいと思います。具体的にはこれからの先生のお話の中にぜひ出てくるとお思いますので、ご参照いただければと思います。最後ですが、先生は著作のもの（ ）されておりますけれども、2002年に出た、「子どもの豊かな育ちと地域支援」という本があるんですけれども、偶然なのですが、これには吉成先生も執筆されていますし、私も執筆していたんです。で、改めてみたら一緒だったのね、と感じているところですが、そういう意味では吉成先生と私も比較的長いお付き合いになっているということなのですが、今日はその待望の先生をお呼びしての講演会ということでしたので、ぜひご清聴いただき、そのお聞きいただいたことを持ち帰って、今後のためあるいは地域のために活動の指針にしていただければありがたいなというふうに思います。それではご紹介を終わりたいと思います。よろしくお願いたします。

吉成先生：どうも、初めまして。こんにちは。今ご紹介いただきました、森と風の学校、NPO

法人、岩手子ども環境研究所の理事長をやっている、吉成と申します。はじめに申し上げますが、今からの話は全部本音トークでいきますので、吉成さんの話を聞いていると、ここは私と同じだけどここは絶対違うわということをおそらくあるという前提で聞いていただきたいというふうに思っています。全部しゃべるつもりでおります。子どもの森について先程学部長さんからもご紹介がありましたけれども、子どもの森の話をするだけでも2時間は軽くいくという感じなので、今日は子どもの森の話はしないで…でもちょっとしますか、全部繋がっているんですけど、森と風の学校の方が先なんです、実は。はじめにちょっとだけプロフィールをご紹介しますが、私元々教育（ ）の人間じゃないんですね。それから（ ）でもないんです。何をやっていた人間かというビジネスコンサルタントなんですね、長いことやっていたのは。ですから、子ども嫌い、基本的に。うるさい子どもがいるとうるさい、と怒鳴ってしまうようなそんな感じの20代でした。ですから、私がそういう教育的な場所に自分がいくななんて考えられなかったんですね。そこには私の父親と私の母親が実は教師です。父親が中学校の教師ですね。とくに引退していますけれども。母親はもう亡くなりましたが小学校の教師です。ですから、戦後の東京の青空教師ではないですが、掘立小屋のトラックから始まって、ずっとやってきたというのはいろいろ聞いていたんですが。私の親戚は教師がたくさんいます。大学の先生も何人もいます。私だけ違う方向に飛び出したといっても不思議ではないかもしれないですね。なんで私は全然違う方向へ飛び出そうとしたかというのをはじめに紹介がてらお話をしたいというふうに思います。教育から一番遠い方向へ逃げようと思ったんです、僕。嫌いなんですね、嫌いだったんです、教育という世界が。それはなぜかと

いうと父親と母親僕にとってはとてもとてもいい親だったと思って今でも尊敬しているんですけれども、親父とおふくろがどちらも教師ですから、朝になると出かけていくわけですよね。私の家はそんなたいそうな家ではなくて、教員の息子ですから、昔の教員というのは本当に貧乏な教員でしたので。でも2人とも出かけてしまうので、お手伝いさんがいたんです。それでお手伝いさんと私が留守番をしているわけなんですけれども、小学生の時の記憶があるんですが、「ただいま」といって6時とか6時半とか遅いときは7時ぐらいですね、慌ただしく僕の父親と母親が帰ってきます。帰って、ピンポンとなってドア開けますよね、私が。で、ドアを開けた瞬間のお父さんとお母さんの顔っていうのが教師の顔しているのですよ。わかります？教師の顔をしているっていう感覚。なんかね、仮面がついているような感覚が僕は幼い時感じました。僕のおふくろと父親なんですけれども、なんか仮面を被っている。なんか僕はおかえりって言った瞬間、評価されているような気がするっていうのがすごく嫌だったっていう小さい時の感覚が残っていますね。それがご飯を作って夕ご飯食べて、今日どうだった？こんなことして今日は遊んだよ、みたいな話をしながら夕ご飯を食べた後、お茶の時間というのがあって、必ずお菓子が出てくるんですね。おかげで今、歯がボロボロですけど。でも毎日夜の短い間なんですけれども、お茶の時間というのはすごい好きな時間なんですけれども、その時間になると親父とおふくろのはめていた仮面がポロッと落ちてくるんですね。その落ちるときまで2時間くらいかかるんですよ。そのくらい教育現場が大変だということの証かもしれないですね。今私がこの歳になって思うことは。でもその時そんなことは一切わかりませんので、なんかいやだなあ、なんか僕一挙一動を見られているような気がするような感じがして、教育の世界か

ら一番遠い方向へ逃げようというふうに決ままして、実は大学が法学部政治学科だったんですけれども、教師の家系ですから、教員免許くらいは取っておこうと思ったんですね。で、一週間だけいったんですよ。一週間だけ。もうダメでしたね。これが続くと思ったら僕はこの地獄には耐えられない、とい思いました。僕の感覚ですので、むちゃくちゃなことっているかもしれないですけども、僕は体幹的に無理だと、黙って聞いているのは無理だったんで、その頃僕は芝居に熱中してまして、学校にはほとんど来ていないというそういう生徒だったもんですから。まあそういうところから始まって、岩手に来ることを決めたのは39歳の時です。1996年ですね。ちょうど宮沢賢治が生誕100周年で、非常に騒がしかった頃です。今では考えられないですよ、当時は。もうとにかく本は次々と賢治の本が並ぶし、映画も始まるし、テレビもやるし、もういろんなものが岩手にもたったような異常な年でした。さっき木村先生ともお話をしたんですけども、前の前の年くらいに阪神大震災があって、その後サリン事件がありましたよね。そういうことがあって世の中が今までと違うぞと。今まで教育を受けてきた若い世代が、()とは違うんですけども、全く違った形で、なにか全然脈絡が理解できないということが起きていることがあった年だったというふうに思いますね。その不安の中で実はサリン事件の時に、私、ビジネスマンでしたので、実は私が地下鉄に乗った千代田線の私の前の列車でサリンが撒かれていたんです。代々木()で止まりました、私は電車が動かなくなって。そのときの電車がああいう事件が起きたんだというふうにあの時思っていましたけれども。そんなことがあって、いろんなことがあって、自分が39歳になったときに、これから先何をやっていこうと思った時に、一番嫌いで一番遠いところに、遠ざかろうと思

った、学校の風景が浮かんできたんですよ。中学2年生の時の今も忘れないんですが、当時中学生だった時に弁論大会というものがあったんですね。この弁論大会が当時非常にクラスの多い学校でしたので、全校生徒でいうと1500人くらいいたんですね。その1500人の生徒の前で、僕は当時赤面恐怖症でもありましたので、とてもじゃないけど人前に立って、マイクを持って話をするなんてとんでもないというような学生でした。中学生だったので。まあ普通そんなことしないんですけども、中学2年生の時にどうしてもこれを言わないと自分は生きていられないっていうぐらい思いつめまして、絶対みんなの前で言わなきゃダメだというふうに思って、もう、呂律が回らなくてもしゃべるしかないと思って、壇上に立ちました。その頃は審査とか何もなかったので、自分がやりたいと思って手を挙げたらみんな出られるというような気風でしたよね、当時の気風というものは。当時のタイトルは今でも忘れないのですが、「テストによってできる欠陥人間」こういうタイトルです。中間テスト、期末テスト廃止しようって叫んだんですね。怖かったです。1500人の聴衆の一番後ろに、生徒指導の先生、柴田先生っていうんですけども、体格のいいサッカー部の顧問の先生が、一番後ろで腕を組んで、ものすごく怖い顔をして、顔がだんだん赤くなってくるんですよ、睨みつけているんですね、私を。で、先生の顔がだんだん近づいてきて、僕のイメージからすると、あとで夢でうなされましたが、こんなビーチボールが迫ってくるくらい怖かったんですね。途中で私は原稿を読んでいますから、中間テスト、期末テスト廃止しようと叫んだ時に、中学生1年生～3年生までが、ウオーツというような地響きになったんですね。僕は絶対にこれで楽屋に行ったら殴られるというふうに思ったんですけど、殴られなかったんですね。それが僕にとっての学校に対する自分が

思っていることを初めて人の前で言った記憶です。それがテスト廃止。ということがあったんですね。で、自分が39歳のとき、自分がこれからどういうふうに生きていこうと思った時に、思い出したのはその風景でした。自分の中でずっと封じ込めていたんですね。いや学校から遠ざかれば、一番遠ざかれば別に危害があるわけでもないし、そのまま忘れておけばいいんだというふうに思っていたんですけども、39歳になってこれからどうしていこうか考えた時、その風景を思い出しました。その時、39歳の時に思い起こした記憶、学校の記憶というのは、どこかに自分が理想としている学校は他にあるはずだというふうに思ったんですよ。青い鳥ですよ。今いる場所じゃなくて、今自分がいない場所に、本当に自分が求めている学びの場所っていうのがどこかにあるはずだ。日本じゃないかもしれない、海外かもしれない、でもわかんないけどどこかにあるんじゃないかってことをずっと自分の中では思いながら、自分の気持ちを封じ込めて、ビジネスマンになったっていう記憶があるんですね。39歳の時に、もう一回宮沢賢治と向き合ったんです。15歳の時に向き合った宮沢賢治と39歳の時に向き合った宮沢賢治っていうのは同じ作品を読んでも全然違った姿かたちを表した姿だったっていう感じが自分の中ではっきり記憶としてあります。よだかの星だったんです。よだかの星を35か6の時に読み直した時に、見えてきた世界っていうのが、架空の世界のような気がしませんでした。今いじめられている子どもとか、今いじめに遭っている子どもとか、今いじめられている子どもとか、何をしないで見ていただけの子どもとか、その場にいる先生とか親とか、そういうものが、僕はいじめられたことはないですけども、もしかしたら、その形っていうのは賢治が70年も80年も前に、よだかの星っていう形で投げつけているセリフの中が、今の時代にあるものと全く変わら

ないというふうに本当に思ったんですね。それを思った時に、自分が嫌だと思っていた学校の学びのスタイルというものをもう一回青い鳥がほかにいないんだったら、自分が作ってということをやってみてもいいんじゃないかというふうにある日突然思ったんですね。で、僕は教育を受けてきた人間じゃないですし、教員の養成課程を受けてきた人間でもないですし、学問的バックボーンを持ってきた人間じゃなくて、ない人間なんですけど、それでもやらなきゃいけないとその時は思いました。自分がやろうと思ったんですね。その時に、どうせやるんだったら、東京じゃなくて、宮沢賢治が生まれたこの岩手県の中に自分を宮沢賢治と同じように、そこで息をしながら、その空気感の中で自分がやってみたいというふうに思いました。ですから、僕が岩手に来た理由というの、あれからマスコミに何度も何度も聞かれましたけれども、僕は知り合い誰もいなかったんです、当時。全く偶然で、全く自分の思い込みだけで、宮沢賢治さんの本だけ抱えて、落下傘で飛び降りてきたんですね。誰も知らないところに。そういう感じで岩手に来ました。これから、宮沢賢治さんを心の中の支えとして、学校を作るからには、宮沢家にも挨拶をしておかなければならないとなぜかその時律儀に思ったんですね。なんでそう思ったかよくわからないんですけども。ちょうど賢治生誕100年の8月なんですけれども、今ぐらいの時期ですね、お盆が終わっ多ぐらいだった時のような記憶があるんですけども、宮沢清六さん、賢治さんの弟さんが当時まだ元気で生きていました。90代でしたね。突然行ったんですよ、お宅に。普通私のように知らない人間が行ったら、門前払いを食うか、水をかけられるかどうかですよ。たぶんこれ、門前払いをくうのが当たり前だろうなと思いつつ、誰も紹介してくれる人間がいるわけでもないの、いきなりピンポンを押したんですよ、

ベルを。するとガラガラっと門を開けて出てこられたのが、清六さん、ご本人だったんです。これから学校を作ろうと思って挨拶に来たんですけどちょっと話を聞いてもらえますかという、ああいいよ、中へどうぞと入れてくれたんですね。それから一時間くらい何も持たないで、まだ移住した一か月目くらいです、だーっと一時間話したんです。それを聞いているうちに彼が、こういうふうに言いました。吉成さんの話を聞いて思うんだけど、自分の兄貴の名前を語りながら、教育の場でそれをやろうと思ったのがあなたで3人目です、なんていったんですね。この人でしょ、この人でしょとって、付け加えました。でもね、みんなうさんくさいんですよ。あなたの話を一時間聞いたけど、あなたもちょっとうさんくさいよ。でもうさんくさいけど、真面目なところもあるかもしれないね。というふうにおっしゃってくれたんですね。その時、そろそろ席を立たないといけなかなとも思って、一時間もいきなり突撃訪問しましたので、腰を浮かせかけたら、その時コーヒーをいただいて飲んでいたんですけども、君、カルピスは飲むかね？と言われたんです。あ、じゃあまだ座っていてもいいんだというふうに思ってですね、それからまた一時間語り合いました。その時に学校を作るんだしたら、僕が名前を付けてやろうかと言ってくれたんです。例えば、林風舎だろ、風童舎というのもありますよね。吉成さんの学校のイメージを聞いていたら、林風舎みたいな感じが合うかもしれないねと僕の目をみていってくれました。その時に私返事しなかったんです。その時に何分間か気まずい沈黙がありまして、やっぱり自分でつけた方がいいよ。ね。っていってくれたんです。自分でつけたかったんですね、私は。2時間くらい話し込んだ後、もうそろそろいくらなんでも帰らなければと思って、そろそろ暇乞いをした時に、彼は僕の目を見て言いました。その時に

言ったのが、宮沢賢治の名前を使って学校を作るからには、報われると思っちゃいけないですよと言われました。まあ吉成さんのやることだから、生きていうちに報われることは絶対ないからねってそれだけは心しておきなさいといわれました。もし、万が一世の中がまかり間違っ、あなたが学校を作って評価するとしたら、100年くらい先のことでしょ、ハハハと笑われたんですね。でもその時、すごい気が軽くなったんですよ。自分がなんかもしかしたらどっか気負いがあって、これからやるのがなんのスポンサーもないし、お金もないし、誰もいない中で始めることでしたので、どうなるかもわからないような話を生きていうちは報われることはないよとそう思ってやりなさいと、なんか後ろからちょっとユーモアたっぷりに肩を叩かれたような気がしたんですね。その話をし始めたのはやっと最近です。今まではしゃべらなかつたんです。最近の本に書きましたので、間もなくその本が出るんですけども、やっとその話をしてもいいかなと15年くらいあから経ちましたので、その話をさせていただくような感じになりました。今までの話は前置きです。すみません、前置きで25分も取ってしまった。

で、森と風の学校の話に入るのですが、これを見てもらいたいんですね。これです。私が森と風の学校を作るときに、実は一枚の絵を描いていたんです。これが、私が岩手に来たが17年前のことなので、この絵を描いたのは16年前です。森と風の学校を作ったのは13年前です。ですからタイムラグがあるんですね。4年間。今の葛巻町に森と風の学校といわれているかみそでがわ分校と呼ばれる廃校の跡が見つかる四年前にこの絵を実はイラストレーターの人に僕が全部言葉で言ったものを絵にしてもらっていたんですね。吉成さんの()写真は、何、といわれたらこれを出します。この中にすべてが入っています。と

僕はいまだに思っているんです。それは何かって言ったら、学校をつくる時に、ひらがなの学校を作ろうというふうに思いました。だから学校教育の中にある学校をつくろうということは初めから一切思っていなかつたんですね。その時僕がお手本にしようと思ったのは、日本にはありませんでした。デンマークのフォルケホイスコーレというところでした。これは農民学校という訳しかたや、生のため、生きることはなんのためかというのを学ぶ学校そういうものがデンマークには100校くらいあるんですけども、その学校が唯一私の支えでした。学校を作るからには、地域の中にある場所でやりたいというふうに思ったんですね。都会でやりたくない。地域があって、文化があって、歴史がある場所でやりたいというふうに思ったんですね。お金が一銭もありませんでしたので、お金が一銭もない私ができる場所はどこだろうというふうに思った時に、ある日突然思いついたのが、学校の廃校だったんですね。実際見つけた場所も5級僻地校、岩手県最後の5級僻地校とよばれる場所です。5級僻地校というのがどういうグレードかというのを私が分かったのは、学校が見つかったからです。グレードがあるんですよ。みなさんご存知かとは思いますが、一級から五級まで。5級というのは最難関ランクです。つまり、一番不便な場所なんです。そんな場所なんですけれども、だから、木造の校舎で、廃校がある場所を使ってやりたいというふうに思いました。岩手県の中には当時100校近い廃校がありました。今から12年前の話です。一番当時廃校が多かったのは北海道です。岩手が3番目くらいですね。たしか。岩手というは中山間地が結構発達しているんで、山の中でも結構分校がありますので、廃校が当時たくさんありました。こんなこう家のような廃校がどっかにないかなというふうに思ったんですね。どういう学びの場所にしたいかといったら、一

つだけ私の中でありました。それは地産地消です。農的な暮らしと、自然エネルギーですね。食べ物とエネルギーの地産地消のすべての過程をここで全部そのプロセスを体験できる場所、その体験を学びに帰られる場所というものを作りたいんです。それがコンセプトです。ですから、鶏がいます。ですから、自然エネルギーがあります。左側には（ ）アグリカルチャーというふうに書いてあります。その上に月影に怪しいマントを翻しているのが、宮沢賢治さんのつもりなんですけど、こんなに太っていませんよ。もっと細かったわけですけども、宮沢賢治の（ ）ソフィーみたいなものをやっぱり大事にこの場所をつくりたいというふうに思いました。ですから、汽車が空に向かって飛んでいるのはまさにそういう意味で、宮沢賢治さんの作品を使わせてもらってこんなふうを描いてたんです。でも本当にこんな場所が見つかったんですよ。まさかと思ったんですけど。それから4年ぐらい経ったあとに、見つかった場所の写真を見ていただきたいと思うんですが、どんな場所かというと、こんな場所なんです。これがさっきの写真ですよ。なんか、似てるでしょう、校舎の感じが、平屋で。よく見てください。青い車掌車があったんです。ブルートレインの車掌車なんです。これ、吉成さんが持ってきたんですか、と聞かれることがあるんですけど、僕が持ってきたんじゃないんです。元々あったんですここに。私が2001年に初めて森と風の学校をこのかみそで川の11世帯しかない小さな小さな集落です、標高が700mあります。一番寒い日は毎年-25℃まで下がります。ですから、本州で一番寒いといわれている藪川と変わらない寒さの厳寒の地ですね。僕行ったのが夏ですから、そんなに寒いって知らなかったんですよ。もしわかっていたら、ここに学校作りませんでした。夏行ったのでここがいいと思っちゃったんですよ

ね。そういうのって本当はあまり考えすぎちゃいけないですよ、きっとね。これみて分かるように、周りは全部森なんです。森と風の学校というふうに偶然名前がついているんですけども、この名前の由来はあまり深く考えたわけではなくて、周りに森があるよなあ、周りに風が吹いているよなあ、ただそれだけの意味合いです。そしたら本当に、モコモコとした（なまこ）のような森だったんです。この森に囲まれた学校だったんですけども、この12年間の間に、森を使えなかったんですよ、今までは、なぜか。ここは北越（ ）製紙という、製紙会社さんのもち山だったんです。だから一切入ってくれるなっていうか、入れなかったんですよ。それが、だいたい時代が変わりまして、国際的な認証登録が始まりまして、森林認証というのができて、地域の人たちにも貢献するような企業でありたいということをや北越製紙さんが掲げるようになって、今から4年ぐらい前に、私のところに北越製紙さんの社員の方がたまたま仕事で泊まりにきたんで、僕はびくびくしながら恐る恐る、あの、ちょっとだけでもいいのでこの森の一部を貸してもらうわけにいきませんか、と聞きました。そしたら彼はなんといったか。全部使っていいですよと言ったんです。その場で。見える限り使っていいですよって言ってくれたんです。びっくりです。本当にいいんですか。と聞いたら、ああ全然かまわないですよと言って、その年の暮れぐらいに、社長さんがわざわざおいでになって、それで契約書を取り交わして、半永久的に無償で借りると。それで子育てと循環の森という森づくりをちょうど2011年から震災のあった2011年から始めることができるようになりました。それまではエネルギーと農的な生活の循環を子どもたちが体験する場所としてずっとやってきたのです。キーワードは循環です。今度は森がそこに加わったので、森の循環というものもそこ

に入ってきたんです。命の一番の源というのは森であり、水なんですよ。それが4年前から森と風の学校に加わりました。

で、宮沢賢治さんの狼森と策森、盗森って有名な話がありますよね。小岩井農場に本当にそういう場所がありますよね。私たちは何をやるかという、森に子どもたちと一緒に作業に入るときに、必ず子どもと一緒に、演劇のように森の中にはいろいろな精霊が今でもいるからねといっているような方向に子どもたちが向いて、ここに畑を起こしてもいいかー？と叫びます。いいぞーとはだれも言ってくれません。そういうことをやってから森に入るというのが私たちのやり方です。葛巻はどういう場所かという、ご存じのように標高700m、() ところの、もともと11世帯だったんですけど、私たちの世帯は2世帯増えましたので、一世帯がなくなりましたので、すごい() というので、実は、昭和30年代からほとんど世帯数が変わっていないんですね。この集落は。限界集落とも言えますが、世帯数は伸びています。一世帯は伸びた、そんな場所です。もともと作った時の問題意識ですね。13年前にこんな問題意識で学校をつくろうというふうに私は考えました。一体どうしたら、子どもたちと一緒に生き生きとした未来を描いていくことができるのかというのが、この学校を作った時の一番大元の考え方です。実は僕は先程学部長さんからもご紹介がありましたように、石と賢治のミュージアムっていう博物館づくりをはじめの3年間、東山の町長さんのアドバイザーになってやっていたんですね。その時に、いろんな展示を書いたり調べたりしていましたので、この() さんの、鈴木さんの実家を知らないでお訪ねしたんですね。そしたら、うちの孫が実はデンマークに行っていて、そこで風の学校という名前です。石と賢治のミュージアムの大元になっている東北

砕石工場というのは、小岩井農場に石灰石を運び込むための生産基地なんですよ。で、その工場を作った() さんがなんと自然エネルギーに関わっているという話を聞いた、これは絶対行ってみるしかないと思って、役場を休ませてもらって彼のところを訪ねて行ったんです。そしたら、教育の場所とはちよっと違ったんですね。それは何かと言ったら、自然エネルギーを日本に売り込む、マーケティングの基地として、研修の場所として彼の学校はやっていたので、教育的な施設とは違ったんですけど、そこにいて彼と話をしたときに、すごく僕は強烈な話を聞いたのですが、それがここに書いてある言葉です。薪と食べ物があれば、戦争を起す国にはならない。これがデンマークの基本的な国民のコンセンサスだと言ったんですね。薪と食べ物ということはどういうことかという、つまり、薪というのは今の言葉で言ったら自然エネルギーもしくは再生可能なエネルギーですよ。誰にも迷惑をかけないでその場所で地産地消できるエネルギーを言っていますよね。薪ってそういうものだと思っています。それから食べ物もそうですよね。自然エネルギーと食べ物の生産自給率を100%以上にしようということがデンマークの基本的な国民のオイルショック以降のコンセンサスだというふうに彼はいいました。なぜなら、とか例示として言ってくれました。風力発電のビジネスはその町に住んでいる人しか、ビジネスを興すことができませんと言ったんですね。最近法が改正されて、その町に住んでいるか、隣の町まではOKになったんですね。つまり、農家の人たちがサイドビジネスとして自然エネルギーに取り組んで結構収益を得ているんですね。日本だったら何が起きるかってその時考えました。日本だったら、風況調査をして、一番風の強いところをメッシュに分かっているわけですよ。じゃあどこがそれを買って占めるかって言ったら、

商社とメーカーですよ。その土地に住んでいる人がビジネスを起こすことができないですよ。日本は。やっと最近再生可能なエネルギーの法律ができて、買い取り法ができて、少しずつ変わり始めましたけれども、それでもまだまだですよ。そのことを、今の言葉でいえば自然エネルギーと農的な生活をテーマに持続可能な地域づくりをするということですよ。これを目標に掲げてこの場所をつくろうというふうに思ったわけです。

では、そこからこのように話が始まっていきまして。もう一つお話をしておきたいのが、僕は東京にいた時に NGO にいたもんですから、温暖化防止の話をしろというふうに言われたんですね。温暖化防止の話をしろと言われたときに、葛巻町から声がかかったんです。移住して半年くらいしたあとだったのですが。温暖化がこういうことが起きるんだよ、これから、みたいな話を私が講演会でした後、葛巻町内の住民の方で、もうおじいちゃんでしたけれども、その人が質問と手を挙げて言いました。なんといったかという、吉成さんの話を聞いていたら、温暖化というのが大変なものだという気がするけれど、俺はここで70年間暮らしてきた実感から、少くくくらいあったかくなった方がいいんじゃないかっておっしゃったんですよ。これは生活実感ですよ。その時にいくら知識で、大事ですけど、知識だけで人が生活を変えたり、何かアクションを起こすかって言ったら、変わらないですよ。知識だけでは。そこに生活実感を感じることがなければ、人は痛い目を見ないとわからないというものもありますけど、わからないですよ、って思ったんです。わたしは何か葛巻に入った時に、東京から風を吹かせて岩手に来たような気持ちが、おごり高ぶったような気持ちがどっかにあったかもしれないです。だけど、それでは伝わらないということで、頭を殴られたような気がしました。これは、その場所で、自分が分かるよ

うな身体言語を探し出して、その言葉で会話をして伝えていかなければお互いにキャッチボールをしなければだめだということですよ。それが大事だということがわかりました。で、そこからもったいない、ありがたい、おかげさま、という言葉が生まれたのはそこからです。そこにもう一つ加えるならば、楽しみながらということばが入ります。学校教育のようなではなくて、遊んでしまっているような感覚。遊びながら学ぶとか、学びながら遊ぶっていうのは12年間ことあるごとに子どもたちにずっと耳たこのように言ってきたんですね。遊んでることと学んでいることがどこか一緒になるような瞬間というのがいっぱいあるんですね。それが僕は一番大事な学びの場だというふうに思っています。こんないろいろあるんですけども、この辺は全部いっちゃえばいろんなものがあります。

そういうお話をして、森と風の学校の話をして、森が子どもを育むということがテーマですので、もう少し具体的な話をしたいなというふうに思います。なぜ私が森が子どもを育むというふうに思うようになったかという話を今日はすることが主題だというふうに思っております。僕は学校教育を受けてきた人間ではないのですけれども、自分が大学に行っている時に、役者になりたいというふうに思っていたんですね。役者になりたいということで、役者の養成所が東京にはたくさんありますので、その養成所の一つに入りました。その入った養成所が普通の養成所じゃなかったんですよ。全然違うところに入ったんですよ。わからないで。いつもそんなんですけど、わからないでつっこんじゃうんですよ。自分が思っている方向に開いていかない、ひっぱられていくような感じです。どういう演劇の研究所に入ったかという、50人くらいの生徒が入っているんですね。そのうちの半分がどういう人かという、僕と同じように役者になりたい人が半分

です。あとの半分がどういう人が入っているかと言いますと、赤面恐怖症、吃音障害を持っている人、学校の教師だけど、教壇に立つのが怖くて、休んでいる人、自閉的な傾向を持っている人、いろんな人たちが、人の前で話すなんてとんでもないってような人たちが半分くらいです。そういう人たちが入り混じりながら、自分が声を発するということが一体どういうことなのか。コミュニケーションするといったことはどういうことなのかということを経験を通じてやるような場所だったのです。4年前に亡くなりましたけれども、宮城教育大学でしばらく教壇に立たれていた、たけうちとしはるさんという方がいるんですけども、竹内さんの教え子なんです、実は。竹内さんから学んだことってというのが自分の中の一番大元にある気がしているんですけども、当時竹内さんがいていたのは自己治癒としての演劇という言葉が使われていました。あまり、治癒という言葉は使いたくないんですけども、自ら癒すという言葉ですよ。いつのまにか癒されてしまうみたいな。自己治癒って言葉さえ使いたくないですね。僕はセロ弾きのゴーシュがすごく好きなんです。セロ弾きのゴーシュの世界って治癒なんて言葉使わないですよ。一切。自分は治癒している人間なんて思っていないですよ。ただ一生懸命うまくなりたいたいというふうに思って、セロを弾いているだけですよ。でもその場にいた人間が、動物たちが、いつのまにか元気になっているというそういう物語ですよ。それが理想です。森と風の学校も。そうしたいと思ったんですよ。大元でいうと。竹内さんがですね、何年か前にこうおっしゃられていました。彼が書いた書物の中でいっていたことです。子どもたちを見ていて思ったそうなんです、これまでは1980年代から90年代くらいまでの子どもたちの言葉というのは、キレル、という言葉がありますよね。キレル、が今度むかつくになっ

たあと、子どもたちの言葉がどのように変わっていったかという、ウザいという言葉が出てきたということを彼はしきりに言っていますね。そのウザいという言葉の中には、キレル、とむかつくという身体表現と全然違う意味合いが入ってきていると彼はいっていました。それはウザいという言葉は人を寄せ付けない言葉だと。もう、ウザいという言葉でシャッターをガラガラと下げている、人とは関係ないですよ、見えなかったことにしていますよというそういう言葉だというふうに彼は言っていました。感覚を閉じた言葉だというふうに行っていたんですね。その感覚というのが僕が岩手に来て17年になりますけれども、やっぱり子どもたちが変わっているというのはすごく感じてきています。この岩手大学でも一年に一回教壇に立たせてもらったりもしているんですけども、ここには教員の方が多くは多いと思いますが、学生も変わってきていますよね。僕めったに来ないから、一年に一回しか来ないので、来ると、すごく思うんですけども、この2、3年はめちゃくちゃ変わってきている気がします。県立大でも盛岡大でも感じます。しゃべるやつがいます。僕怒鳴ります。しゃべったら。つまみ出します。出るまでしゃべらないです。本当にそうなんです。なかったです今までそういうこと。子どもと向き合うときにあるべき論、抽象論で話してもだめで、やっぱり体幹的なコミュニケーションを基にして、本音の会話をしていくというのがすごく不足していると感じます。子どもたちを見ていて。森と風の学校では毎年サマースクールというのをやっています、季節ごとに子どもたちが自由に応募してきて、フリースクールで学びの場っていうのをずっとやっています。これは自然エネルギーを学ぶことであったり、遊ぶように学ぶことだったり、地域のことを知ることであったり、未来のビジョンを描いてみることであったり、いろんなことをここではやっ

ているんですけども、ここで起きたことを具体的にお話ししましょう。

みなさんが、見ているところと、私は学校の外の子どもたちの姿を見ているので、そこで起きていることは同じではないと思うのですが。いろいろあるのではないかということは強く感じています。子どもの森の館長をやっていた時に、一つ話を加えますけど、なぜわたしが子どもの森の館長をしたのかというと、児童館だったからなんです。児童館というところがどういうところなのかたぶん知らない方がおおいと思いますので、私も知らなかったです。0歳児から18歳未満の子どもたちならだれでも来ていいよという場所なんです。一切の規制がないんですよ。これ岩手の中でも誤解している人たくさんいるですよ。児童館というのは小学生が来る場所だろうと、こういう回答がほとんどです。でも、0歳から来ていいんですよ。ですから、子育て支援というものも入ります。それから、中学生とか高校生の思春期子どもたちがくる場所としても使えます。ですから、子どもの森っていうのは遊びだけを提供するだけと思っている人がたくさんいるので、そうじゃないよ、児童館はというのを強調したいと思います。子どもの健全な育成と子育て支援というのが入りました。その2つの地域の拠点として、児童館というのは、やっていく場所だよと。だから地域支援と関連するんですね。新妻さんと私が書いた本のテーマもそれでしたよね。ですから、どういうことかという県立の児童館であるということは、県内に当時130の児童館があったんです。県内の130の児童館をまとめていく一つの旗柱になるというのが県立（ ）に求められていることだったんですね。だから引き受けたんです。だからわたしの仕事の半分は県内の児童館や地域支援を進めるための人材の育成をするというのが私の仕事です。ですから、県内をぐるぐるとまわっているのが私の仕事だ

ということがあります。その時気が付いたことがあります。初めは小・中・高生に関わるのが対象でした。それから、指導者や支援者の育成に関わっているのは小学生や中学生の先生方との面談や話し合いというのがほとんどでした。一年目は。子どもたちが抱えていることや、気になることどものことや、暴力のこともありますし、そんな子どもさんを抱えて（ ）している親御さんや地域の支援者の人と話をしていた時に、この問題がどこからきているのかということやをさぐらなければいけないというふうにかんがえたんですね。そうすると、幼稚園や保育園ではどうだったんだろう。それからもっと0, 1, 2, 3ではどうだったんだろうとどんどん戻っていったんです。支援者さんたちのヒアリングをする中で。すると全部一緒だったんですね。体幹的にずっと思っていることなんですけれど、問題の根っこは同じだというふうに思っています。それが小学校までどんどん加速されながら、きますので、幼稚園から小学校に上がる時に一つの断層がありますよね。小学校から中学校に上がる時もこれまた（ ）がありますよね。この（ ）をどうやって乗り越えていくのかを考えていくのが岩手大学の教育学部の大きなテーマだというように僕は思いますけれども、私の中でも大きなテーマでした。ということやを付け加えながら現場の話をしたと思います。

これは2010年の話で昔になってしまうんですけども、EST（ ）持続可能な開発のための教育のサマースクールというのをやりました。一番長くやった年は19泊しました。岩手県の子どもの夏休みがほとんど終わってしまうんですね。大体9泊10日くらいがベストなのがこれまで8年間やった自分の感覚ですね。いいんですけど、20日間やるとなにか起きるかという、スタッフが疲れ果てます。持ちません。スタッフから止められたんですね。吉成さんは子どもの森に戻っ

やうけど、私たちは20日間全部対応しなきゃいけないんで無理ですよ。といわれて、妥協しようということだいたい9泊10日に戻ったんですね。その時の話をしたいというふうに思います。環境問題とか持続可能性のようなものをテーマにしていますので、初めに子どもたちが関東近県や東北から80人くらい応募があって20人くらい集まって、スタッフが10人くらいです。総勢30名程度で9泊10日やる人が多いんですが、初めにキーワードになります、くるくるリサイクルというようにことを言っております。これは生活を基盤としたスクールですので、なぜ2泊3日とか3泊4日にしないのかということですよ。2泊3日とか3泊4日ではだめなんですよ。子どもはあつという間に帰ってしまうので、なんかこう役割を演じているうちに終わってしまうんですね。混乱がちょっと出るくらいで終わっちゃうんですよ。自分の鎧を脱ぐ暇もないんですよ。一週間くらいかかりますね。自分の自が出るまでに。だいたい3泊から4泊くらいすると自が出てきます。で、一週間くらいでだんだん子どもたちの生活が毎日規則正しい生活の中で心や体が整えられていって落ち着いてきます。10日くらいたつと自己表現が出てきます。僕の体験的な感じですけども、そんな感じ今までやっています。でも、ひらがなの学校であり、学び合う学校という言い方をしているんですけども、先生はいません。()程度する人間はいますけれども、一緒に学び合うという形でやっている学校なんですよ。ですから、朝6時15分に起きて校歌を歌います。6時30分から地域の防災無線が鳴ってラジオ体操をしますよね。この時間が、私が一番大事にしている時間です。子どもの姿が全部見えるからです。昨日はよく寝たかなとか、ストレス溜まっていないかなとか、昨日寝汗かいて風邪ひいているんじゃないかなとか、スタッフも我慢できないくらい疲れているんじ

ゃないかなとか、岩手大学のスタッフもいます。そう思いながらやっています。一番集中して子どもとスタッフを見ている時間です。なんかバラバラな方向を向いているでしょ、学校じゃないっていうのはそういう意味です。どういう方向を向いてもいいんです。子どもたちはまだ眠気眼でやりますね。それから、朝仕事と夕仕事というのがあります。朝仕事と夕仕事というのも大事なプログラムなんですよ。毎日の生活と一緒にです。家の中で本来あった、これをやるわけです。仕事はいろいろカードに作ってありまして、カードの仕事をグループの中で自分がやりたい仕事というのを子どもたちに選んでもらっています。一番人気なのは犬のお散歩。どっちが仕事しているかよく分かんないですよ。子どもは遊んでいるかもしれないんですけど、一応仕事だと思って。大人気の仕事です。これはあんまり人気がないですね。鶏に餌をやって水を変えるという仕事なんですよ。これなぜ人気がないかという、雄鶏が威嚇してきますので人気がないですね。でも誰かが引き受けますよね。何も言わなくてもおれがやるよと引き受ける人が出てきます。これ一番、最低人気ですね。つまり一番人気がないです。なぜ人気がないかというたぶんお分かりの方いると思いますが、左の子どもは5年連続できている子どもですよ。右の子は初めての参加です。これ、むちゃくちゃさいんですよ。毎日汲み取ったおしっこをバイオガスのタンクの中に入れる仕事です。うちも汲み取ってバイオガスのタンクの中に入れて、そこからガスを取り出して、子どもたちとコアを飲んだりするんですよ。でも、子どもたちってすごいですね、初めは吐きそうとかいうんですがでも、何日も何日もやるうちこの辺に()が飛ぶんですけど、飛んでももう大丈夫です。慣れというのはすごいです。このキャンプの一番の目的は何かというと、勉強じゃないんです、気持ちよさ、気持

ちいいという感覚を学ぶことなんですね。気持ちいいという感覚がなぜ大事かという、根拠なき自信の一番大本をつくるものだからですね。なんのために吉成さんは学校を開いているの、と言われたときに必ず答える内容です。それは、根拠なき自信を子どもたちが僕がいうんじゃないで、子どもたち自身で湧いてきたらそれはうれしいよねって。それが僕がこの学校をやっている一番大本の理由です。根拠がある自信っていうのはスポーツ、勉強ですよ。評価尺度がありますよね。でも、もっと勉強ができ、もっとスポーツができる子どもが現れたら、足をすくわれてしまうような自信ですよ。それだけだったら。根拠ある自信も生きていく上で重要ですよ、でもその背後に根拠なき自信がそれを支えていないと、もう差別する人間を生むだけですよ。と僕は思っています。で、根拠なき自信はどこからくるのかということだったら、これは（ ）先生も言っていますけれども、家庭の中でのお母さんの役割ですよ。お母さんが毎日かけるなんてことない、今日お布団干しといたからねとか、お風呂わいているよとか、お菓子作っておいたからね、というお母さんの何気ない愛情溢れる言葉がけですよ。それはお母さんの言葉がけだけでなく、やっぱり子どもが自立していくプロセスの中で、こういう社会教育の場所のなかでもそれが必要だというふうに僕は思っています。それは子どもたちが気持ちいいっていう感覚と気持ち悪いっていう感覚を感じ取れないとわかんないですよ。外側から入ってきた情報全部信じますよね。というふうに思っています。前置きが長くなってしまったんですが、何をやっているかといと、朝、必ず雨が降らない限り、外ごはんなんです。夏休みですから、外に気持ちのいい場所でお日様も入ってきますから、そこで全員で一つのテーブルを囲んでご飯を食べると、めちゃくちゃ気持ちがいいっていう感覚が体の中から

わいてきます。これが大事なんですよ。理屈じゃないというふうに僕は思います。近所のおじいちゃんにも10日間よろしく、というふうに声をかけていきます。とにかくこの年は暑かったので、裏の川で一日にひどいときは3回水に入るんですよ。僕は56なので無理ですよ。3回目からは若いスタッフに頼みます。それでも子どもたちは喜んではいりますね。これも快感です。これいいでしょ。みんな笑っている写真です。これは誰が一番水に耐えられるかというのをにこにこ笑いながら我慢しているというような状況です。この時に2010年の森の中に入った時に、4日間森の中にもって朝から晩まで作業したというプログラムをやったときのことが僕には非常に印象に残っているんですよ。毎日森の中に秘密基地をつくりに通うんですよ。一日目、森の中に初めて森の中に入る子どもたちの姿を見ていると、どういう姿かということ、子どもの目線は人間の目の高さからしか動かないんですよ。都会と同じで10m上をみあげる子どももいないです。だいたい2、3メートルしか見ないんですよ。なんかじっくりしていないんです。2日目もそうです。3日目くらいになると少し変わってきます。3日目くらいになると10m上の木の葉っぱを見ている子がいるんですよ。それから、地面をみている子もいるんですよ。視界がいろいろとばらけています。後ろから見ていて、これも感覚なんですよけれども、子どもたちの心や体が森の中に流れ込んでいる、溶け込んでいく感じというのが、僕が後ろから見ている身体感覚からしても分かります。そのときに何が起きているかということ、これは僕の感覚なのでデータもないので、申し訳ないのですが、毎日夜子どもたちとふり返りをやるんですよ。だいたい子どもたちは5人くらいのグループを4つに分けて、しゃべりやすいような状況で、今日どうだったか、明日何がやりたいか、どんなトラブルがあったのか、どんな発見があっ

たのかということを知りたくて子どもの言葉で語ってもらいます。その時語ってもらったとき、森に入っていない初めの何日間かはすごくよそよそしいんです。ロボットじゃないですけど、血の通ったこうあったかいもの同士と一緒にいてその人たちが一緒になってお互いを感じながらグループを組んでいるという感じが全くしないんです。でも、一日経って、2日経って森の中に通うことによって子どもが自然の中で体や心がほぐれていくと、隣にいる子どもたちを感じるようになるんですね。これはなんなんだろうと思いました、私は。それからもしかしたら、森の中にはいるということが、森のなかでいろいろな情報を吸い取っているわけですけども子どもたちは、大人もそうですが。子どもが森の中で見えない物を感じ取り始めると、子ども同士の関係も感じ取るようになるんですね。子ども同士の感じというものを感知取れるようになると、一緒に何かをやるということができるようになる。これがぼくが森の中で感じた一番大きなことでした。それが今から5年くらい前のことだというように思えるんですが。それからもしかしたら森の中で何かをやるということは、森の中で自分の体をなじませていくことは大事なことだなというふうに思い始めたということが、僕の中で森と出会っていった大事なきっかけになったということをお願いしたいと思います。

そして、もう一つ、太陽光パネルの話をしてしたいと思います。これは、子どもたちから気付かせてもらった学びのスタイルということをお願いしたいと思います。太陽光パネルで子どもたちに電気をためてもらったコンテストというのをやったんですよ。ただ普通に授業のようにやっても子どもたちは何にも面白くないので、2つのグループに子どもたちを分けて2つのグループに太陽光のパネルを渡して、バッテリーとコントローラーも渡して、詳しい説明は一切しないで、この中に子ども

たちがバッテリーに電気をためられるかというのを競いましょうってやったんです。でもそれだけだとムチですよ、子どもにとっては。アメがないとだめですよ。アメを作ったんです。子どもたちがいっぱい電気をバッテリーにためたら、僕がひそかにもっている誰にも見せたことのないヨーロッパのアニメーションを君たちに見せてあげるからねってそれをアメしたんですよ。でもみんなが電気をいっぱいためないと途中でそれが切れちゃうかもしれないよ…。どれくらいためたらいいか僕もわかんないんだよねとどほけながら言ったんですよ。それから何が起きたかという子どもたち、めちゃくちゃ必死になって電気をため始めたんですよ。太陽光パネルをどう操作するなんて一切いわないですよ。そのあと子どもたちなにをやったかという、その太陽光パネルを東から太陽が昇ってきますので、朝打ち合わせをしているんですよ。こういうふうに置いたら、太陽光パネルに太陽が直角に当たるから、これが一番発電効率がいいんじゃないかとか、いいながら朝話しているが聞こえるんですよ。僕は一切黙っています。子どもたち何を始めたかという、この太陽光パネルは天体望遠鏡のように（ ）装置はついていませんので、動かさないと追っかけないですよ。何が起きたかと言ったら、自分たちで遊んでいるうちに、そろそろ動かした方がいいんじゃないかと思ったやつが勝手に動かすんですよ。一日の間に何度も何度も子どもたちがちょっと待って、ドッジボールちょっとタイムといって太陽光パネルを動かすんですよ。休み時間に。これが起きたことです。これを先生が初めに、太陽が動いていくので、パネルを動かすように担当を決めましょう、なんていっちゃったら、子どもの気付きの場面を奪っちゃいますよね。それは僕はそれを分かっていたわけでもなんでもなくて、子どもに教えられたんです。あ、そうかって。子どもたちにた

だ渡せば、子どもたちは自分で考える力はあるんだなということを実際にその時思いました。そういうことがあったきっかけになったキャンプになりました。本当に子どもたちはドキドキしながら見るわけです。

こういう生卵が食べられない子どもがいますよね。食べたことがないって子どももいます。朝は外で食べますので、つば釜で炊いてご飯を食べますので、おこげができますけど、おこげが一番うまいんだなんていうと争って食べますよね。子どもは。すごい勢いで食欲全開です。文部科学省がすすめている、早寝早起き朝ごはんはいらぬですよ。一週間一緒に生活していればあつという間に（ ）のように食べますよね。初めは暴飲暴食しちゃいます。どれくらい食べたらいのかわからなくて。で、途中で分かって戻すんですよ。一週間もあればあつという間に子どもは変わります。これは本当にそうです。

これは子どもたちとピザを焼いている場面なんですけれど、真ん中の子は興奮すぎて鼻を押さえていますけれども。石釜でピザを焼いたり。

これいいでしょ。これ岩手大学に来た時にこの写真で説明したのを今思い出したんですけども、私はこれをコンクールに出すとしたらどういうタイトルをつけるか。これは盛岡の小学校6年生の男の子でもう暇さえあればずっと火の番をする、大好きなんですよ。僕のタイトルはこうです、（ ）火遊び。できないですよ、今。教育学部を卒業していくような学生さんたちが、先生になっていく学生さんたちが、火をつけるっていう授業たぶないんですよ。僕は教育学部のその辺にですね、ピザ窯つくってほしいですね。私教えに来ますよ。ここに煙がたなびいていたら最高ですよ。

それだけではなくて自然エネルギーの教育だけではなくて、自然エネルギーというのは

ある一つの生活のための道具にすぎませんので、地域の中のこれからの暮らし方っていうのをどうしていくべきなのかっていうのを日本のあるものだけを語っていても、みんな子どもたち信じないんですね。いろんなヨーロッパの例も出しながら。でも、日本でもこういう例はあるぜということ結びつけるような解説を加えてあげると、子どもはだんだん信じ始めますね。あ、そうか、この葛巻にある風力発電所が、もっともっと大がかりな形でいろんな形で結びついていたら持続可能な町ができるんだよねってことを海外の事例を入れて説明してあげると、分かるようになりますけれども。ですから、海外の例も非常に大事です。

これ、何をやっているかという、自転車で発電をしていますね。にこやかに笑っていますが、5分も持ちません。ペダルが重いので。必死になって代わりながら電気をためます。それもこれもアニメーションを見たいがためです。子どもたちといろいろなこと考えながら、この子どもたちは小学生が10年後のビジョンを作るということは無理だという考え方がありますが、わたしはそうじゃないとずっと思っていました。子どもたちと一緒に森と風の学校で10日間を暮らすことをする中で、子どもたちが生活のリアリティというものを一週間もたつとだんだん子どもの中にでき始めます。そのリアリティを基にして、将来のイメージを肯定的なイメージをすることはできるんじゃないかというふうに思ってやった年がありますね。本当にある日突然ですね、森の学校の10年後の姿をこの模造紙に描いてみてと言ったら、爆発的勢いで描き始めたんですよ。その時の映像もってこなかったんですけど、誰もしゃべらないです。凄まじい勢いで2時間ずっとマジックのキュッキュという音しか聞こえないんです。自分の中にリアリティがあると、いわゆる抽象的に学んだ事だけじゃなくて、自分が体験した

ことがあると、抽象的に学んだことと体験したことをどっかでつなぎ合わせながら、必死になってビジョンを作り始めるんですよね。その力っていうのはものすごい力だと僕は思っています。() 森と風の学校では絵にかくってことをやるんですよね。絵にかくとなんかできる気がするんです。もちろん本当はそれを支える技術だったり科学だったりいろんなものが必要なのですけど、とりあえず、子どもたちはどういう生活をお望みなのかということも10年後森と風の学校がどうなったらいいのということを考えながらやっていくといろんな形ができていきます。一人の小学生の男の子が、森と風の学校の隣に自分が20歳を過ぎたら、バーを開きたいと書いてきたんです。バー森風って書いてるんですよね。お前これさ、12世帯しか集落ないんだけど、ここでバーなんてやるの?ときいたら、だって俺は毎年ここにきているけど、おんちゃんたちって、俺たちと一緒にだから、毎日お酒を飲めないでしょって思って。俺がここでバーをやって飲ませてやるよというわけですよ。あ、そうかと思って、じゃあやってねといったんですけど、こないだ高校2年生でこないだ来ていまいたけれども、本当になるかどうかかわからないですけど。本当にやってくれたらうれしいです。だから、大人も含めて信頼関係ができていくと、根拠なき自信がだんだん生まれてきますので、それを基にしたらビジョンというのは描けるわけがないですね。肯定的な未来の姿というのは。そういうふうに僕は思います。これすげえよなと子どもたちを褒めて、褒めて、大学のゼミレベルだなんかといながら子どもたちと話すとき、その時は子どもたちはにんまりした顔をするんですけど、あとで絵日記を読むと、今日おんちゃんに褒められたなんて書いてるんですよね。子どもってあんまりそういうことを言わないんですよね、言わないけど書いている。うれしんでしょね。

で、これは最後です。いよいよ10日間終わって帰るといえるときに、これ小学校4年生から中学校3年生まで来ていますので、一番左の子は小学校4年生です。一番右の子は180センチくらいあるんですけど、アメリカンスクールの中学校3年生なんです。中学校3年生と小学校4年生は遊べないかというところは大丈夫ですね。缶けりでしょ、それから氷鬼でしょ、花一匁でしょ、それからハンカチ落としでしょ、中学生嬉々としてやりますよ。高校生も嬉々としてやりますよ。でもやったことないんですよ、ほとんど今。これ、大学の授業であるんですかね、そういう、なんでないのかって思いますね。コミュニケーションを深めるツールも技術も含めて、やっぱり僕は大学の教育の中に必要だと思います。現場に入った時に困ります。先生たちが。なんもできないんですよ。楽しさを知らないんです。子どもたちと一緒に混ざって本音でぶつかり合っていく楽しさを知らないの。授業のカリキュラムを作るだけでは片手落ちだと僕は本当に思います。うちにきた大学生を見ていて思います。でもそこで学びます、学生たちも。そういうふう思うんですね。それで最後はこういうふうにもう帰ろうかと言っていますが、ちょうどこれ帰る日の3日くらい前、一週間ぐらいの時に、やっと演劇を入れるんです。2日間だけ即興劇をいれるんです。最後の2日です。最後の帰る前の日に、森の中で太陽光パネルにためた電気でステージの照明を作って森の中にステージを作って観客も入ってもらってそこで即興劇をやるんですね。宮沢賢治の。これがいつも毎年のお決まりのパターンですね。それをなんで最後に持ってきているかということ、初めは子どもたちが一緒に学び合う場を作るということです。それから、地域がどういうふうに作られているのかということも歴史を含めて、学んでいきます。最後にその学んだことをどこかバックボーンにしながら、今度は自分がどう

感じているかの今のここにいることを子どもたちがどう感じたり、気づいたり、考えているかということを自分だけの言葉にしてもらうということをしたいですよね。表現です。表現活動が絶対大事だと思っています。それをやらないと子どもたちは自分の体に刻んでいくことを無意識のままなんです。それを演劇という方法を借りてこの何年間かはずっとこういう形でやっています。子ども同士でもこうやって体に触れてリラクゼーションすることができません。今。子ども同士で体に触れるということが少ないですね。それから、演劇のセリフというのは特に、いじめの場面とか怒鳴る場面というのを必ず僕入れるんです。声が出ないですよ、小っちゃくて本当に声が出ない子もいます。その時に学校で何をやっているかといったら、先生たちがなぜ声が出ないかっていうのが分からないから、もっと大きな声でだせー！と腹から声を出せー！とそういうことしか言わないでしょ。無理くり声出せって言ったって緊張して出ないですよ。演劇ってそうなんですよね。発声練習なんて嘘ですよ。今アナウンサー学院とかそういうところでやられている発声練習というのは、()のやり方です。これは戦後今から40年も50年も前にやられているメソッドです。そんなものがいまだにまだ生きているんです。無理くり言葉を唇の形を作ったって出ないですよ。相手に届かないです。声だけ張り上げたって。相手に届かなかったら、キャッチボールのための言葉じゃなかったら言葉じゃないですよ。ただ一方的にことばを投げつけているだけの大音響ですよ。そうじゃなくて、言葉を話すことの意味っていうのを子どもたちに考えてもらいたい。ということもあって発声練習もやっています。その発声練習を朝やっている時に一人の女の子が僕のところにきて、おんちゃんちょっと実験台と一緒にセリフの練習相手になってといわれたときに、やったんで

す。そのときにカエルのごみ靴といういじめの場面がたっぷり描かれた宮沢賢治の童話を使ったんですね。その時にケンカの場面がありまして、なんだこのー！という場面があるんですね。なんだこのー！という場面で子どもがそのセリフを飲んじゃうことがあるんですよ。なんだこのー！という言葉はもっと相手に向かっていかなければならないですよ。ポーンと言葉をいわなければならないのに、子どもたちは出ないんです。初めは。無理くり出せって言ったって出ないです。そうするとやっぱり子どもは身体表現として出しますので、体を緩めていて、子どもがこうやって足踏みをしながらなんだこのー！という言葉を出したりとか、そういうことを子どもとゲームのように遊びながらやったんですね。そうすると見ていた子どもたちがおれもやりたい、と子どもたちが次々と出てきて、なんだこの合戦ゲームというのが始まったんです。これめちゃくちゃおもしろいですよ。小学校1年生対決と小学校6年生対決とか。それから一卵性双生児で来ている子どもがいるんで、一卵性双生児対決とか。すると、一年生と6年生がやったときに、体格のいい6年生を一年生が言葉で倒したりするわけですよ。一年生の言葉の方がよっぽど集中して相手に刺さるようにピンポイントで言葉がずっと動かすような子どももいるわけですよ。それを感じ合うということをやっているとその場の空気感の中で、子どもたちわかるんですよ。どういう言葉が自分に降り注いでいる言葉で、この言葉はすごく空虚な言葉で、自分を乗り越えて言っているとか、先生の言葉も同じなんです、大人の言葉も。この人の言葉はすごく自分を見て言っているけど、空虚な言葉で、自分の頭を越して向こうに行ったとか。自分の前で言葉が落ちて沈んでいったとか。こういう言葉を子どもたちが語るようになるんですね。こういうのは講演で言ってもなかなかわかりづらいので、

一緒にやってみないとわかんないんですけど、こういうのは。そういうことがいろいろ出ていきます。言葉の中で。

これはいろいろ身体表現を子どもたちと遊びながらやっています。子どもたちの配役をするんですけど、配役は必ずオーディションでします。全員役あるオーディションです。だから、オーディションで役が振られるのを待っているのを待っていたやつはなんの役にもつけないということです。()です。前の日考えておいて。そうすると、子どもたち20人が20人とも必死になって前の日この役をやるって考えておくんです。次の日、手を挙げます。その時前の日に必ずもう一つ言葉を言います。それは何かというと、セリフの多い言葉がいい、セリフがたくさんある役がいい役とは限らないからねといっています。一つもセリフがない役の方が観客の心の中に残る役だったということはいくらでも舞台では起きるぜっていっておくんですね。だから役の量の多さで主役になるんだって努々思うなよと初めに投げかけておきます。すると子どもたちは本当に言葉をしゃべりたくない子は一切言葉がない役をします。これは何の役かということと身体表現で自然の情景描写をやる役があるんですね。これは昔谷川()さんがやった身体()というやつですけども、そういうやり方で子どもが風になったり、お日様になったり、石になったり、水になったり、木になったりそういう役割をやってもらいます。すると必ず自分で手を挙げます。必ずバツティングするんです。よだれかとだれかが。その時にどうするかなんでうよね、困るのは。その時どうしているかということ、僕が独断と偏見で選ばせてもらっています。この男の子は前の年もナレーターをやりたいといって一年間待ったんですね。またナレーターを志望してきました。2年間もし僕が落としたらこの子どもの心に傷を負わせるかもしれないというふう

思いまして、僕も真剣に聞いているんですけども、この子は一年間待った成果がありました。本当にこの役につけて一生懸命やってきました。たった2日間しかないんですけども、子どもたちはセリフを暗記して、それから衣装も自分たちで全部作ります。森の中で練習をしています。夜の森に入っていくことなんてないですからね。こういう場所です。で、いよいよ始まります。これはいよいよあと15分で客入れをするという状態で、そこの真正面の奥が講堂で、暗幕が引かれていて、暗幕の向こう側には地域のお父さんお母さんとか教育長とか盛岡に住んでいるお父さんやお母さん方や親せきが来ています。100人くらい入っているんですけども、その場で子どもたちはもうドキドキですよ。舞台に立ったこともないし、2日間しか与えられていないのだから、セリフも満足に言えるかわかんないという状態で、劇としては完成されていない状態でやるんですよ。そこでやります。ドキドキしながら子どもたち、心臓がバクバクだというのがもうわかりますよね、子どものひきつった顔を見ていると。子どもたちなにをやるかといったらちようどああいう暗幕ってというのは必ず穴が開いていますよね。穴から自分のお父さんやお母さんが来ているか見るんですね。この時間というのは僕が一番好きな時間ですね。始まる5分前に観客にいて撮らせてくださいといった写真ですね。あったかい雰囲気です。劇が始まりまして、主役になった子どもとか、本当に大丈夫なのか思ったり、本当に粗暴な行動や気になる一面を持った子どもとかいるんですけども、劇をやり始めるくらいで自分にどんどん集中してきますので、落ち着いてくるんですよ。本当におもしろいです。最後に歌を歌って終わったんですけども、この歌はおんちゃんには秘密なといふように極秘のトレーニングがすすめられていたみたいで、僕は一切知らされなくて、おんちゃん

んには言わなかったんですけど、ここで歌を一曲歌いますなんて言って歌を歌ってくれました。これは終わった後、車掌車の中でなんちゃって、ワインパーティーを作っちゃいまして、ワインの中にはりんごジュースとかぶどうジュースが入っていますけど、子どもたちの見えなところで僕が調合していますので、ごめん、暗いところで調合したらから、一滴か二滴入っているかもよとか言っているんですね。そうすると乾杯と言ってから酔いつぶれたふりをするやつとかちびちび舐めるように飲みながら文庫本を読むやつや、いろんな役柄を子どもたちは演じはじめるんですね。

これはいよいよ帰る日の朝なんですけれども、10日間の子どもたちの生活の中で、必ず今日は5年生の日とか6年生の日とかいうようにして、自由にカフェで自分の好きなケーキを頼むことができて、心行くまで漫画を読んでいい日というのを必ず設けます。自由時間ですよ。子どもたち大好きですこの時間だけは一言もしゃべりません。ずっと自分に集中していますね。この時に気取ったやつがいて、コーヒーブラックでなんていうやつがいます。日ごろしゃべっているやつもしーんとしています。

いよいよ、明日帰らなければいけないという日に、子どもたちに課題を出します。初めての課題です。なにかというと、9日間ここで過ごしてきた中で自分が一番居心地の良かった場所にいてその居場所で自分が2時間ぐらいですけれどもこの9日間をふり返ってもらって自分が一番森と風の学校でなにが楽しかったか、何が一番面白かったのかを絵にしてもいいし、歌にしてもいいし、詩にしてもいいし、作文にしてもいいのでとにかく2時間たたずんでから帰ってきてくださいとお題を出すんです。ただし、友達とは絶対にしゃべらないでと制約を言うんです。そうするといろんなところに子どもたち飛び散ってき

ました。一番人気だったのが犬だったんですよ。犬のまわりに4人くらい女の子が黙って犬を見ながら何か書いているんですね。この女の子は何が一番好きだったかというとかフェなんですね。このカフェのハンモックにもたれながら2時間なにかずっと書きつけていました。この女の子は川で遊んだのが気持ちよかったんでしょうね。2時間ずっと絵をかいていました。で、いよいよ明日でいよいよ終わるよねと言ったときに、この9日間感じてきたことを自分の言葉にしてほしい。みんながいるけども、いろんな人がいる前で勇気を振り絞って自分の言葉を投げかけてほしいといいました。もちろん本音で。その話をした時に、この3人目の中学3年生の180センチの子がですね、空を見上げて大粒の涙をこぼしながら、しゃべり始めたんですね。帰りたくない。俺は絶対帰りたくない。僕は神奈川から来ていて、〇〇家の長男だから、長男としての自分の役割があるから、家に明日帰らなければいけないというのは頭では分かっている。だけど、本当は帰りたくない。と涙のような涙でした。それからあとの17人、全員がぶあーっと泣きながら語って帰りたくないという（ ）だったんですね。

これは帰る日の昼ですね。いただきますとごちそうさまはその日やりたい人が出てくるということになっていて、役割を決めていません。そのときの気分で自分がやりたかったら言ってくれという感じなのですが、全員出ました。その時の子どもたちの気分というのはたぶん全員がそういう気分だったから言ったんでしょうね。

もう一つこの年やったことなんですけれども、10年後の未来というものをテーマにしましたので、10年後の森と風の学校の姿を描いてもらったんですが、一つの宿題というのが、10年後の自分は何をやっているか。10年後の自分に宛てた手紙を書いてくださいということを午前中にやってもらったんですね。よく

キャンプとか野外教育の中でやられているのは3か月後の自分とか半年後の自分に手紙を書いてくださいというプログラムなんです。でも、半年後や3か月後じゃ変わらないんです。その先の姿がなんとなく見えるような気がしちゃうんですよ。10年後は見えないですよ。僕だって10年後は見えない。子どもにも見えるわけがないですよ。でも10年後ってというのはなぜしたかという、見えないということと、もう一つは小学校4年生以上ですので、10年後は必ず成人しているんですね。大人になっているんです。大人になっている時の自分というのをこの10日間の自分のリアリティをかけにしながら、なんか弾みしながら書いてくれといったんです。といったように自分への手紙を書いてもらいました。その手紙をまだ7年目なんですけど、僕はまだ預かっています。その手紙をみんな変える間に僕に見せてくれたんです。その手紙の中にいまだに忘れられない手紙というものがありまして、それはこういう手紙でした。東京からきた小学校6年生の子どもだったんですけれども、10年後の自分へと書いてありました。10年後の自分は、ある日この手紙を受け取るんだと思う。でも10年後のあなたはこの手紙を受け取った時どう思うだろう。10年前の自分が小学校6年生の自分がある夏の10日間、岩手県葛巻町ある森と風の学校の中で楽しく暮らしたことを10年後のあなたはもう覚えてないかもしれない。でも、一つだけ約束してほしいと書いてあって、この手紙を受け取ったら、その手紙を受け取った週の土曜日か日曜日に、必ず葛巻町にある森と風の学校に行ってくれと。行ったらわかります。行ったら分かるから、必ず行ってほしい。日本の中にいるとすれば、それから住所が変わっていないとすれば。こういうふうに書いてくれたんですね。その手紙を受け取った時に、すごくうれしかったんですけど、10年後まで死ねないなというふうに思いました。火事が

あったらその手紙を一番に持ち出さなきゃいけないなとも思ったんですけども。まあ何を思ったかという、子どもは将来を、未来を描くことができるということを思ったんですね。今日申し訳ないんですけども、5時で終わってそのまま（ ）市に入らなければいけないので、終わったらすぐに向こうの方に移動することになっているんですけど、子どもたちが今あるリアリティを元にしたが、根拠なき自信というものを子どもの中に生まれていくような、下支えするような大人たちのサポートというのが僕は本当に必要だというふうに思っています。僕になにができるかわからないんですけど。そんなんで、明日から行くことになっています。ちょっと話を続けます。

そしてこれ、10年後ファイトという言葉で最後は別れたんですね。親はなんのことを言っているか分かりません。でも僕と子どもたちは分かっているんです。なぜ10年後というふうにしたのかとかね。お話でお疲れのことと思いますので、（ ）どんな場所なのか5分でまとめたやつがありますので見ていただきたいと思います。

(映像)

吉成先生：はい、ということで5分間くらい映像を見ていただきましたけれども、初期の映像なんですけど今から8年くらい前の。でもこの時やられていることと、今やっていることと、方向性というものは全く変わってなくて、まだ残された短い時間を今何やっているのというまだ先に進んでいますので、その話を最後にもう少し加えさせていただきたいなというふうに思っています。そのためにはやっぱりどうしても2011年の3月11日のお話をしなければならぬというふうに思います。2011年の3月11日起きた時、これはここにいらっしゃるみなさんもそうかもしれませんけ

ど、直接的な被害が葛巻町にはなかったのですけれども、本当にこう衝撃を受けました。どうしていいかわからないような衝撃を受けました。その時は地震が感知しなかったんです。自分は山道を走っていらしたので、揺れていることすらわからなかった。葛巻の山の中を走っていたんですね。でも森と風の学校にたどり着いたら、スタッフがみんな表に出ていまして、地震だと叫んでいたところに居合わせたんです。いろんな支援活動を今もやっていますし、これまでも細々とやってきていますけれども、でもやってきたんですけれども、自分のエネルギーの半分も出なかったという感じが今もあるんですね。やっと少しずつ回復してきているかなという、遅ればせながらスタートしたのかなという感じがしますというのが正直な話で、茫然自失です。なんで茫然自失になったかということ、僕のところは子どもたちと一緒に自然エネルギーの子どもに教えてきたからなんです。あることもないことも、学校でならわないことも、子どもたちは聞くわけですよ。原発の施設はどうなのって。その時に、原子力発電はいろいろ問題があるよって、なんで危ないのかって話をしていくわけですから、その時に子どもが何人か聞いてくるわけですよ。だっておんちゃんさ、俺のクラスでは原発はCO₂を出さないからクリーンエネルギーっていうふうに先生教えているよっていうんです。そこから全部崩していかなければならないんですけれども、僕ははっきり言います。原発の後始末はどうなるの？活断層の上に立っているっていうのもあるよね。そんなことをいろいろ言ってきて。でもそんなことを長いこと話しながらもまさか自分が生きてる間にそんなことが起きるとはつゆほどにも思っていなかったわけですよ。それが本当に起きたので、それまではきよしろうの反原発の歌とか子どもたちと一緒に歌いながら騒いできたんですけれども、全くなんかやっぱり()

が変わったと思います。本当に起きたので。その責任は僕にもあるので、止められなかったということについては。それをどういうふうに分が子どもの前に立った時に、どういうふうに対応していくのか本当に今も考えていますし、悩みながらやっています。その中で3.11が起きた次の年から、決めたんですね、やろうと思って。何をやろうと決めたかという、子どもたちと一緒にラジオ番組をつくらうと思ったんです。インターネット放送です。今は機材がすごくよくなったので、インターネット放送ができるんですね。子どもたちが感じている不安も、大人社会に感じていることも、今ある楽しいことも、今ある辛いことも、自分たちで一切検閲なく、子どもたちが番組を作って、それを放送するっていうことをやろうというふうに分めたんですね。それがちょうど一年かかりました、始めるまで。それで、一年後にそれを初めて、2012年の3月から放送を森風こども自由ラジオ放送という名前を作ってですね、これなんで森風自由ラジオ放送かと言いますと、自由ラジオというのは、第二次世界大戦のフランスの(パルチザン)が作ったラジオ番組なんですよ。そういう意味で、ぼくはやっぱり()として、子どもと一緒に公共の電波ではなかないえないことも、やっぱり子どもたちには言ってほしいし、言えるような環境を支えたいというふうに思っていますね、こういう番組をつくりたいと思って始めました。で、5日間子どもたちと合宿をしたんです。子どもたちと合宿をした中で、子どもたちは通常だったら葛巻の町の中に出て、インタビューをしたりなんてふつうできないですよ。で、それは小学校なんかで教えているニーズ教育だったら、いきなりそこで子どもたちが自由に角度を変えて質問なんてやらないじゃないですか。見てても。全部台本通りにしゃべって台本通りの言葉を聞いて、それをなにかのメディアに出すなんてそんなのないです

よね。そういうことじゃなくて、誰と出会うか、自分がどういう問題意識でその人とぶつかるのか、その時に何が起きるのかということをやっぱり子どもたちと一緒に考えるラジオ局を作りたいとい風に思ってやってみようと思ったんです。そして1時間番組を作りました。子どもたちが全部アイデアを出してくれました。本当に森と風の学校にいる2匹の犬の会話とか、しょうもない本当に心温まるラジオ番組を作った子どももいましたけれど、その中のいくつかのグループは2011年の3月11日に自然エネルギーの自給率160%といわれている葛巻町の電気が落ちたのかということを実撃インタビューしました。子どもたちが。僕が言ったセリフじゃないですよ、子どもたちが考えたんです。子どもたちがニュースキャスターに扮して、葛巻町の路上インタビューを刊行して、そのあと葛巻町の役場の方も一生懸命答えてくれましたけど、包み隠さずいろいろなことを答えてくれて、国の制度がどうなっているかということも含めて、いろんな話をしてくれて15分のニュースキャスターのラジオ番組ができました。最高でしたね。感動しました。泣きそうになりましたよね、その時。じゃあまた来週もまたこのチャンネルで、って子どもたちが言うんですよ。本当に来週このチャンネルがあるんじゃないかというふうに思いましたね。それは森と風の学校のホームページで聴けるようになっていまして、その年の春やって、その年の夏やって、その次の年の春にやって、3回やっています。今年の夏がもう少しでアップされますね。子どもたちが本当に自分で考えなきゃいけないってなったときに、こんなに子どもたちは問いを深めていく力が僕はあると思います。1時間番組を作る力が子どもたちにはあるんですよ。その情報がリテラシーでどんなに危ないかということもどんなに新聞が全てのことを語っているか語っていないかということも冷静にちゃんと見分ける力を

子どもたちがつけるということも小学校では習えないですよ。日本では。でもやんなきゃいけないと本当に思います。今は。そうしないとわけわかんなくなりますよね、教育が。そう思っています。それを僕は今年はちょっとできないんですけども、来年以降なんです。沿岸の災害FMと組んでやりたいんですよ。子どものラジオ番組を沿岸に広げたいというふうに本気で思っています。そういうことをもうやらなきゃならなくなった時代なんだと思うんですね。今までは森と風の学校の吉成さんがコンサルタントをやっていたけれど、道楽で山の中でねやっていたけれど、なんか楽しそうにやっているからいいわよねって思っている人たくさんいるかもしれないけど、道楽でやっているわけではないんですよ。もちろん。3.11以降の言い方はもう完全に違います。子どもたちとこれから先の時代をどうサヴァイブしていくか。大人知らないですよ。どうでもいいですよ、僕ははっきり言って。でも今の子どもたちには情報は伝えたいし、これから子どもたちが大人になるときの社会の作り方というのをサヴァイブしていく方法も含めて、一緒になって子どもたちと考えていくということを僕はやりたいといふうに思って、この学校をやっているということを語ります。今は。もう間もなくこの森と風の学校の森風文庫という名前でこの先ブックネットのシリーズで出していきます。一冊目が間もなく9月の中旬に出ますので、興味がある方は是非読んでいただきたいなというふうに思います。今お話ししたような12年間の森と風の学校、目に見えない編と称して今来ても見えないことですね。目に見えないけどつながっているものというのはたくさんあるので、目に見えない物を言葉にして残さなきゃいけないというふうにとても強く思っていますので、それを今一冊の本が間もなく出るということです。ちょっと早いのですが、一回たたまらせていただいてというふ

うに思っております。ご清聴ありがとうございます
 いました。

木村先生：吉成先生どうもありがとうございました。
 せっかくの機会なので、ぜひご質問等受
 けたいと思いますが、いかかでしょうか。本
 当にあのどんな質問でもいいので、はい、ど
 うぞ。

：（ ） 的な反面というか
 （ ）

吉成先生：（ ） に関してはですね、親も
 あるかもしれないんですけど、私のところ
 に子どもをやる親御さんというのは、どっち
 かという原発容認法じゃない子どもたちの
 方が多いです。パーセンテージとしては。ど
 のくらいかはわからないですけどね。こな
 いだスプリングの今年のスクールも子どもた
 ちとラジオ番組作っていたんですけど、今
 年もラジオ番組の中で、原発から二年とい
 うことで災害をふり返るような番組を作った子
 どもたちもいましたし、その時にいきなり清
 稜の歌を歌い始めた女の子たちもいて、そ
 こからものすごい盆踊りのようになりまし
 て、そこにいた8割ぐらいはきよしろうの反原
 発ソングを歌いながら練り歩くというよう
 な感じになったもので、割とそういう子ども
 たちは多いかもしれないですね。

木村先生：ほかにいかがでしょうか。

：一番最初の絵にあったサステイナブル
 アグリカルチャーっていう、今回はどっちか
 という教育に側面してお話しいただいたん
 ですけども、その活動の中にアグリカルチ
 ャー的なものあるいはその（ ） その
 くらいだと自分の身体をコントロールする、
 あるいは（ ） というのは分かるん
 ですけども、そちらの方に関しては何か継続

的な活動とか、あるいは春秋冬を通しての活
 動とかっていうのはあるのでしょうか。

吉成先生：ちょっと時間がないのであまりお話し
 できないかもしれないんですが、そうですね、
 今日は教育的側面、あるいは子どもたちの側
 面から話をしていますが、一つは農的になっ
 ていう意味合いで次やっている農場は小さ
 な、小さな農場なんですけれども、そこで
 やっていることというのは花巻に住んでいる
 （ ） とおる）さんという、岩手大学
 農学部でもいろいろ関連されているらしいん
 ですが、パーマカルチャーっていうパーマネ
 ントカルチャーの略語なんですけど、その生活
 のデザインングですね。生活周辺の農的な生
 活の全部を（ ） も含めてデザインして
 いくような考え方のことを彼と出会ったと
 ころからかなり当初から取り入れていまし
 て、そのつながりみたいなものですね。ただ農場
 をやるっていうだけでなく農的なものと、
 自分たちの暮らし方みたいなものをどうい
 うふうに関連していくのかっていう、パーマ
 ントカルチャーを語るとなるとめちゃくちゃ
 難しいんですけども、僕も。でも、それ
 を入れていこうということで大人の人たちと一
 緒にそういう講座をやったりというのは当初
 から実はやっていたんですけど、岩手大学の農学部
 の学生さんも今までは来ていました。そう
 いうこともちょっとやっているので、さっきの
 バイオガスの話だけ、ちょこっとしましたけ
 れど、その大きなテーマとなるのは物質の
 循環なんですよね。農的な作物の循環もそ
 うなのですが、その循環を子どもも大人も含
 めて分かって、その仕組みも含めて会得して
 いくことを大事なテーマにしているの、最
 近でやったことっていうと、ロケットストーブ
 というストーブの作られ方が今爆発的に世界
 で人気がありますけど、それもストーブです
 ので、森林の（ ） をもってきて
 それを元にして全部ヒートベンチを作ったり

して、それも循環ですのでいろんな循環を学び合うということも一つの大きなテーマです。

木村先生：よろしいでしょうか。じゃあ本当に興味深いテーマで2時間お話を聞かせていただいた（ ）もっとお伺いしたいわけなんですけれども、釜石に行かなければならないということでこちら辺で（ ）と思います。改めて吉成先生に感謝の送りたいと思います。ありがとうございました。